

「高田浩運日記」一九六〇年七月～十二月

翻刻・城下賢一¹，木多悠介²，海野大地²，田中将太²，落合優翼²，中村凌太郎²，鹿島晶子

The Diary of Hiroyuki Takata, July - December 1960

Kenichi JOHSHITA, Yusuke KIDA, Daichi UNNO, Syota TANAKA,
Yusuke OCHIAI, Ryotaro NAKAMURA, Akiko KASHIMA

¹⁾ *Osaka University of Pharmaceutical Sciences, 4-20-1 Nasahara, Takatsuki, Osaka*

²⁾ *Graduate Student, Ritsumeikan University, 56-1 Toji-in Kitamachi, Kita-ku, Kyoto*

(Received November 17, 2019; Accepted December 23, 2019)

— Historical Document —

高田浩運日記 1960年7月～12月

城下賢一¹, 木多悠介², 海野大地², 田中将太², 落合優翼², 中村凌太郎², 鹿島晶子

The Diary of Hiroyuki Takata, July - December 1960

Kenichi JOHSHITA, Yusuke KIDA, Daichi UNNO, Syota TANAKA,
Yusuke OCHIAI, Ryotaro NAKAMURA, Akiko KASHIMA1) *Osaka University of Pharmaceutical Sciences, 4-20-1 Nasahara, Takatsuki, Osaka*2) *Graduate Student, Ritsumeikan University, 56-1 Toji-in Kitamachi, Kita-ku, Kyoto*

(Received November 17, 2019; Accepted December 23, 2019)

Abstract This document reprints a part of the handwritten diary of Hiroyuki Takata, 1914-1977, a senior official of the Ministry of Health and Welfare in Japan, with an introduction.

Takata's life shows a path common to most high-ranked bureaucrats in the mid-twentieth century in Japan. Graduating from the University of Tokyo in 1936, he joined the Ministry of Interior and was transferred in 1941 to the Ministry of Health and Welfare, which was divided from the Interior Ministry. During the World War II and the aftermath, Takata swiftly got promoted and was appointed as the vice minister, one of the most high-ranked posts for the bureaucrats in 1963. After retiring as a bureaucrat, he was elected as a candidate of the ruling Liberal Democratic Party and occupied the seat of the House of Councilors until his death about for a decade.

In the period of this reprinted diary, Takata served Ministers of Health and Welfare as the Director-General of Minister's Secretariat, handling a wide range of the ministry's operations and negotiating with lawmakers and pressure groups. The diary provides us the details of policy processes during the initial stage of the rule by the Liberal Democratic Party.

Key words — Postwar Japanese History, Party Politics, Bureaucracy, Social Welfare and Politics, Social Policy

1) 大阪薬科大学 人間文化学グループ email:johshitak@gly.oups.ac.jp

解題 「高田浩運日記」 一九六〇年七月～十二月

城下賢一

1. はじめに

今回、国立国会図書館憲政資料室所蔵「高田浩運関係文書」から日記（以下「高田日記」と略記）の一部^一、すなわち一九六〇（昭和三十五）年七月～十二月の記事を、御遺族の了解を得て漏れなく翻刻している。今回の解題・翻刻は、本紀要前号すでに発表した「高田日記」一九五九年七月～一九六〇年六月記事の解題・翻刻^二に続くものである。「高田日記」の筆者であり、厚生事務次官や参議院議員を歴任した高田浩運（一九一四年～一九七七年）の詳細な経歴やその人柄、周辺の人々、「高田浩運関係文書」を含む高田に関係する史料の概要については、すでに前号掲載の解題で紹介している。そのため、この解題では、主に今回の翻刻内容の紹介を行いたい。

2. 官房長としての高田

高田は、一九三六年に内務省に入省し、地方勤務を経て一九四一年に厚生省に異動した後、戦後の一九四七年に課長に昇進し、さらに一九五五年に局長に昇進した。児童局長を約四年間、薬務局長を約一年務めた後、一九六〇年六月十七日、官房長に着任し、（保険局長に転じる）一九六一年十一月七日までその任を務めた^三。今回翻刻の「高田日記」の時期は、高田の官房長の在任時期の前期三分の一ほどに相当する。

各省で大臣官房をとりまとめる官房長職は、戦後に新しく設けられたもので、一九四五年九月一日、初めて大蔵省で設置された。官房長の新設は各省庁の内部の政策を統合・調整し、そのための調査を行い、外部

に対する政治力を強化する官房強化の一貫として行われたものとされる^四。

厚生省が官房長を新設したのは一九五四年で、大蔵省などに比してだいぶ後のことではあるが、期待される役割は同様であった。当時の神田博厚生大臣によれば、官房長設置の理由は、社会保障制度の進展にともなう厚生省の所管行政が質量ともに著しく拡充されたため、これらを社会保障という統一的見地に基づき省の内外にわたり連絡調整しなければならぬからであった^五。「高田日記」からは、専任として三代目の官房長になった高田が、大臣・次官を支え、ときにはその代理として、まさに重要省務の連絡調整にあたっていることが窺われる。

一九六〇年当時の厚生省は、国民皆保険・皆年金に代表される社会保障制度の拡充整備を行っていたが、高度経済成長のさなか、一方では制度の不備・未整備を指摘して改善を求める声に対応し、他方では過剰な制度整備や財政負担となることを恐れて反対する声に対応し、妥協点を見出す作業を繰り返さなければならなかった。このため、高田官房長の役割は極めて大きいものがあつた。

こうした認識をもとに、以下では、今回の翻刻内容の範囲を、医療問題、生活保護問題、史上初の女性大臣の着任、一九六〇年総選挙立候補者への厚生省の組織的支援の四点から紹介したい。

3. 医療問題

厚生省は、医療制度に関して、日本医師会と対立を繰り返してきた。高田が官房長に着任する前年一九五九年六月には、中央社会保険医療協議会（中医協）に推薦している委員を医師会の武見太郎会長が全て辞任させ、かつ新たに推薦もしないポイコットを行ったため、中医協が開催できない状況に陥っていた^六。

この問題は、開業医を中心とする医師会とは別に病院医で組織される日本病院協会（日病）との対立が両会間であつたところ、厚生省は、中

医協委員や社会保険診療報酬支払基金（支払基金）理事の改選にあたって医師会と日病との双方から委員推薦を受け付けようとしたため、医師会が反発し、中医協ボイコットに至ったものである。一九六〇年三月には、今後の中医協委員推薦は（日病を排除して）医師会が独占するなどとした六項目を厚生省に突きつけており、両者の緊張関係が断続的に続いていた。高田官房長にとって、保険局を支援して医師会との関係を打開することは重要な任務だったため、六月の着任早々、挨拶回りの一環で武見会長を訪ねたが、「前途多難を思はせる」と記している^七。

高田の予感に違わず、支払基金理事推薦問題をめぐって医師会との対立は再燃した。「高田日記」によれば、八月に任期満了となる同理事の選任にあたって、医師会と日病の双方に依頼を出す方向で、高田ら厚生省幹部は七月下旬から本格的に検討を行い、二十三日には田中正巳政務次官が武見に面会して下交渉したがうまく行かず、その後、山中貞則自民党医療特別委員長に斡旋を依頼したもののやはり不首尾に終わった。このため、山中の他、大平正芳官房長官や小川平二副長官といった政権の中枢にも了解を得て、八月二十日、医師会との摩擦を覚悟の上で、森本潔保険局長が日病・医師会両会長に推薦を依頼した。森本・武見会談の様相を伝え聞いた高田が「後者は決裂の様相の様」と書いている通り、武見会長との間では折り合いがつかなかったものの、厚生省としては所要の手続きは取ったと判断し、推薦依頼を公表した^八。

ところが、武見の反発を受けて自民党内は医師会擁護に変化し、二十四日、党医療特別委員会から厚生省に医師会への配慮を求める要望が伝えられた。すなわち、日病への推薦依頼は撤回を求めないものの、一名重複とし、医師会が推薦する候補を日病に飲ませようとするものであった。ただ、田中政務次官が持ち帰った医師会の推薦候補はともども日病が受け入れられるものでなかったため、翌二十五日、田中政務次官が山中を仲介として再び武見と会見し、推薦候補の入れ替えを求めた結果、古賀良彦東北大学附属病院長を推薦候補とする見通しになった。これを森本が日病側にも相談し、ようやく候補確定の運びになった^九。

とはいえ、最後に至るまで大人しく終わりはしなかった。「高田日記」の次の記事に見られるように、武見は最後まで医師会的主導権を主張すべく推薦を発表し、おそらく詳細を知らされていなかったであろう日病などが憤慨し、逆に厚生省におしかける事態となった。厚生省は、日病などの説得を行わなければならない破目に陥り、武見に振り回され続けた。

帰廳ひそかに喜びを分ったところが、一時頃医師会側から右の者推せん^{（馬）}の旨発表ありしとかで、日病はじめ七団体側、医師会案を厚生省が吞ましたとの考へで憤慨。厚生省におしよせ、事態逆轉。推せん拒否の態度を見せた。次官^{（馬田正巳）}、保険局長省議終了後関係者説得に努力^{一〇}。

こうして支払基金理事選任はどうか落着いたものの、医師会のボイコットにより中医協が開けない問題はなお尾を引いていた。

特に影響が大きかったのが、カナマイシンの保険適用問題であった。カナマイシンは新たに研究開発された結核の特効薬で、すでに三月、結核予防審議会から医療保険制度の下で使用できるようにする保険適用を求められていた。しかし、新薬の保険適用には、中医協への諮問・答申を経なくてはならなかった。医師会が中医協ボイコットを続けている状況でどのようにすればカナマイシンの保険適用を実現できるか、厚生省には困難な課題であった^二。

問題をさらに難しくしていたのは、安保闘争により岸信介内閣が退陣したため、後継の池田勇人内閣が自民党政権に対する国民の信任を確保すべく秋に解散総選挙を予定しており、有力な支持団体である医師会を刺激することを禁じていたためである。「高田日記」九月二十二日条に、カナマイシン問題が出てくるが、政務次官を通じてその点を指示されていることが明確に記述されている。

午後、大臣政次官以下主脳者集まり保険局のカナマイシン問題、医療協議会問題打合せ。

田中政次官、党の保利総会長に會見話合ひたる結果もあり、医師會との摩擦、選挙前はさけるべきことを金科玉条とし、カナマイシン採用のため、医療協を何らかの形においても至ることは見込なし。

従つて、専決処分によるか、選挙まで延期するかの決断を迫られることになった^{二〇}。

高田は官房長としてカナマイシン問題に当たっていたが、官房長らしく、より広い観点から問題を捉え直し、戦略を立てていた。(一九六一年に大問題になる)医療費引き上げや中医協改組にこそより焦点を当てた対応をし、そのための体制整備を急ぐべきであつて、カナマイシン問題については必ずしも選挙にこだわることなく、「機宜の措置」を取るべきと主張した。

医療協問題に関し、次官に進言。^(高田正三)今までカナマイシン問題は選挙後まで延期を終局のおちと考へていたが、考をかへた。即ち、医療費引上げ、医療協改組が、當面の主作戦になると考へられ、これに保険局の全勢力を傾注出来る態勢にすることが用兵の根本であるべきだ。その意味で、諸懸案の早期解決をはかるべく歯科関係の問題は医療協に附議して議定をみるべく、委員の発令その他の準備をいそぐ。カナマイシンの問題については機宜の措置をとる。かうして一面、歯科医師會から医療費引上げ問題を医療協に提起させ、主導権をとらせるとともに、医療費問題を医療協の土俵に引き込み、イニシアチブをとる。

この案の難点はやはり、大臣、政次官の説得にあるが理窟上はいけないといはれる理由がない。問題は保険局の決意をこれに結集できるか如何である。

午後、次官、^(森本潔)保険局長より、政次官及び大臣にカナマイシン問題につき打合せ^{二一}。

しかし、こうした高田の主張は通らず、十月二十五日「朝九時過大臣を中心にカナマイシン問題等省議。とにかく選挙すむまで話にならぬ」と、大臣らを説得することは叶わなかった。選挙後に改めて協議は再開したものの、「カナマイシン問題、中山厚相、党幹部と連絡の結果もさっぱり片つかず」と、やはり進展は見られなかった^{二四}。

カナマイシン問題を解決に向かわせたのは、総選挙が終わったことのみならず、内閣改造により、十二月八日、新たに古井喜実が厚生大臣に就任したことによる。古井は元内務次官で、厚生行政の諸問題の解決を期待されていた。機能不全に陥っている中医協を経ずに、大臣の専決処分によつてカナマイシンの保険適用を決定しようというのが古井の考えであつた^{二五}。

高田は自身の主張にも近い古井大臣の方針を支持したが、主管の保険局が反対にまわつた。高田は「保険局の態度は不賢明であり、不可解である」「どうも保険局側ふんざりが悪い」と批判的に記している。結局、古井は専決処分を諦め、半数の十二名が欠員だった中医協委員のうち「中立委員のみ補充して過半数とし、書類持ち回りで決定。本日、同意の旨答申」という手続きで、翌年一月一日から実施を決定した^{二六}。

古井が専決処分による決定をあきらめ、形式的にせよ中医協への諮問・答申を経たことについて、当時保険局次長であつた山本浅一郎は、「森本さんの陰の努力があつたことにもよる」と述べ、森本保険局長以下保険局の反対を一因としている^{二七}。他方、以下の「高田日記」十二月十二日条によれば、中医協委員からの異議、特に健康保険組合連合会専務理事の高橋敏雄の反対が大きかったことがわかる。

カナマイシン問題につき今日中に解決することを目途として、^(正)高田次官は朝高橋敏雄氏に會見。一方僕は、その結果をまたず、

田中、山中氏ら国会の関係者に事前通告を行って廻ったが、あとで十一時頃次官から高橋氏の反対意見意外に強硬なることにつき一寸まてとの事。大臣室で三人打合せ種々協議。^{〔古井重〕}大臣は尚初志を貫きたい気持が強い。一応他の人々も当ってゆてくれとの事にて、次官は、大橋武夫氏、日聖連の前田氏に會見。そのあと、大臣を中心に打合せを遂げたが、一応本日は発表を見合せ。一日の余裕をおき医療協との関係につき更に工夫、努力することになる^{一八}。

このため、古井大臣は方針を転換し、翌十三日、中医協の児玉政介会長と會見を行い、中医協への諮問等の手続きを固めた^{一九}。

4. 生活保護問題

次に、当時の生活保護問題について、「高田日記」の記述をもとに見ていこう。

高度経済成長の進展とともに、経済成長に取り残された人々をめぐる問題は、この時期、生活保護制度の内容をめぐって政治問題化してきた。確かに、福祉・社会保障の整備拡充は一九五五年の自民党結成時の綱領等の文書で宣言され、実際、国民皆保険・皆年金制度実現のための法令整備がされるなどしてきた。しかし、生活保護については、高度経済成長の開始とほぼ重なる一九五四年から一九六〇年にかけて「水準抑圧期」と評価されるような状態にあった^{二〇}。

生活保護の問題を取り上げたのは、大蔵省出身で、第一次近衛文麿内閣や東条英機内閣で大蔵大臣を務めた賀屋興宣であった。賀屋は戦犯として終身刑の判決を受け、ようやく一九五八年に刑期短縮・満了となり、同年総選挙で初当選したばかりであったが、池田内閣が発足した直後の一九六〇年七月二十二日、『毎日新聞』『私の意見』に「最低所得は五倍増に 池田内閣に千億社会保障を望む」を発表し、「わが国の経済は珍しいほど繁栄の途をたどりつつある」「早ければ八、九年で、遅くと

も十二、三年では大丈夫二倍になる。しかし、ただ平均が二倍になったというだけではない。金持はますます富み、貧乏人は少しもよくならないのではこまる」「国民のなかの弱いもの、きのどくな人、貧しき人びとについては特別に考慮を払う必要がある」「一般の所得二倍増は十年かかってよい。最低所得層の倍増は一兩年の間にやってもよい。十年後には五倍増にしてもらいたい。生活扶助や失業手当の金額も引き上げるべし、国民年金もうんと増す」などと主張した^{二一}。財政家として著名で、池田首相にとっても郷里広島や大蔵省の先輩でもある賀屋の発言は注目を集め、自民党には新たに賀屋を会長とする社会保障特別調査会（いわゆる「賀屋委員会」）が設置され、社会部会とは別に政策審議に当たることになった。

厚生省にとって、賀屋の主張は願ってもないものであったろう。「高田日記」七月二十五日条に、先の紙上意見発表から三日後の同日にただちに賀屋を訪問したことが分かる。八月以降、「賀屋委員会」に高田らが何度も出席し、賀屋と個別にも政策協議を行った。池田首相も社会保障の充実に意欲を示していたことから、厚生省は積極的に予算要求を行うことを決定し、その第一に、生活保護基準の二十六％増を要求することとしたのである^{二三}。

このような大幅な引き上げはもちろん財政当局にとって看過できるところではなかった。大蔵省は公共投資、社会保障、減税のバランスが重要で、既往の基準決定方式や、経済効果の大小から見て公共投資と減税を優先すべきで、生活保護基準を厚生省の主張のように増額することは実現不可能として反対の態度を示した^{二四}。生活保護基準の引き上げ幅をめぐっては、一九六一年度予算編成において厚生行政における焦点の一つとなった^{二五}。

生活保護に関連して、この他、一九六〇年中に「高田日記」に記された問題につき、もう三点触れると、第一は、基準増の前に補正予算で組まれた生活保護の期末一時扶助の問題である。この問題は、「高田日記」によれば、十二月一日、自民党政務調査会からの指示として持ち込まれ

た。ただ、その金額が「一世帯五〇〇円というのでそれでは余りに小額に過ぎる」ため、高田らは増額を求めることとし、二日、政調副会長と協議し、「午後の會議で一応一〇〇〇円とし、政府に申入れることに決定」した。しかし、三日に「生活保護の件、どうしても五〇〇円を動かさる」ことが判明し、「これで決着ついた恰好」と諦めざるを得なかった^{二五}。

第二は、朝日訴訟問題である。国立岡山療養所に入所して生活保護を受給していた朝日茂がその金額が日本国憲法第二十五条に規定された生存権に照らして少なすぎ、生活保護法の内容が憲法違反であるとして訴えたものである。一九六〇年十月十九日、この裁判の一審判決が下され、原告勝訴とされたが、「高田日記」の同日条には、判決を受けて即時控訴を決定した様子が簡潔に記されている^{二六}。

第三は、先述の生活保護基準二十六%増の要求につき、オフレコ内容が報道されてしまった問題である。この要求を含めた厚生省の新政策につき、八月八・九日、社会部会に説明を予定していたところ、これに先立つ六日に記者クラブにオフレコで説明を行っていた。この内容が「幹事側と協定せるところに相違し」、十日朝刊で一斉に報道されることが八日頃から明らかになった。高田はその対策に追われ、関係各所と連絡・調整し、「特に生活保護基準二六%増という具体的数字が出ることは困るという見地から何とかその分だけでも差しとめよう」と面談や電話で働きかけ、「半分位はこれだとまるかなあ」と期待したが、結局効果なく、十日朝刊では『毎日新聞』を除くほぼ全ての新聞で報道されてしまった。働きかけを受け入れた『毎日新聞』の記者が憤慨し、逆にこれに了解を求めなければならぬ始末であった^{二七}。

5. 史上初の女性大臣の着任

次に、初めての女性大臣を迎えた厚生省の様子について見ていこう。

高田は官房長在任時、計四名の大臣を支え、今回の翻刻に三名の大臣が記されているが、このうち第一次池田内閣で史上初めて女性大臣と

なった中山マサを取り上げたい。「高田日記」七月十九日条には、「昨夜〔中略〕十時過ぎた^{二八}たか、N・H・Kの中尾氏から厚相は中山マサ女史らしいとの電話でこれはえらいことになったと思っっているうちに、だんく確実になってきた^{二九}」と、驚きに満ちた厚生省の状況が詳細に記録されている。

池田内閣は、前述の通り早々に解散総選挙を予定しており、総選挙勝利のため、池田らは所得倍増計画を練り上げていたわけだが、「高田日記」からは、中山の女性初の大起居用も、選挙対策の一つと考えられていたことが確認できる。すなわち、十九日、中山厚相が確定した直後、高田は池田の側近で第一次内閣の官房長官に就任したばかりの大平正芳に面会し、「政ム次官は余程し^{三〇}っかりした人をもつてこなくては困るぞといったら、すまんく選挙やらねばならんでねえと^{三一}」と話を交わした。

このような目的で起用された中山に対しては、大臣としての資質を危ぶむ視線が浴びせられており、前掲引用からは、高田もその視線を共有していたことが察せられる。実際、国民年金制度の取り扱いをめぐる政治過程では、中山の政治的力量に不安を感じさせられる経緯が記録されている。

国民年金制度は一九五九年四月、国民年金法の制定によって創設されたもので、拠出制年金を基本とし、補足的に福祉年金（無拠出制年金）を設けていた。このうち、まず同十一月から、所得制限（本人の所得が一定額に満たない場合）をかけた上で福祉年金を支給し、一九六一年四月からは、拠出制年金のための保険料の徴収を開始することとされたものである。

この国民年金制度について、第一次池田内閣発足まもない頃、解散総選挙が予期される状況で与党自民党側から問題とされたのは、第一に、拠出制年金制度について保険料徴収が先行して不評なため、制度実施を延期・再検討させようとするもの、第二に、軍人恩給や厚生年金など他の公的年金制度を受給するものに対しては福祉年金を支給しないとされていたところ、軍人恩給の受給者などには福祉年金の所得制限以下

の生活水準にある者がいるため、併給を認めさせようとするものであった^{三〇}。

厚生省としては、与党側のこれらの要求に対してはいずれも制度の根幹に関わる点として見直しには否定的であった。ただし、厚生省としては別に国民年金制度の問題は正を検討していた。その第一は、福祉年金の所得制限が低すぎ、生活に困窮する水準の家庭でありながら福祉年金を受給できない家庭があることから、所得制限を緩和（引き上げ）しようとするもので、第二には、離婚などを原因とした生別母子世帯は別れた夫や母の父が生活を援助するべきものとの考えから福祉年金が支給されていなかったところ、実際に援助が行われる例が非常に少ないため、生別母子世帯にも福祉年金を支給しようとするものであった^{三一}。

国民年金制度をめぐるこうした対立構造において、高田ら厚生省事務方は、大臣が厚生省の立場をしっかりと主張するよう依頼したが^{三二}、時には「健康すぐれず、脳貧血をおこしたとかで〔首相官邸に〕ゆくことを肯ぜず^{三三}」と、体調不良を理由に主張の機会を逃す状況であった。このため、次の記事にも見られるように、厚生省が強く拒否していた軍人恩給などとの福祉年金の併給を検討せざるをえなくなり、逆に厚生省が検討していた福祉年金の所得制限緩和も断念に追い込まれた。

黒金氏に秘書を通じ連絡とつたところ、軍人恩給との併給がとりあげられて、所得制限緩和等アウトということが分つた。然もこれは総理の発言によるらしい。これは最悪の才定である^{三四}。

黒金氏に會つて、所得制限緩和の問題について話したが、池田総理は依然反対だし、またむしろはかんべんしてくれといつてとりあげないので詮方なし。しかし、それも無理ないことである^{三五}。

とはいえ高田は、一方的に中山厚相を批判しているわけではない。厚生省が進めようとする社会保障制度の充実に対して、池田総理自身が否

定的であるとの認識を明確に記している。解散総選挙を前にした自民党の遊説、その最初となる九月八日の東京での自民党演説会で、池田総理は「そもそも経済の成長は設備増↓生産増↓所得増↓減税↓資本蓄積↓設備増という拡大循環の輪をめぐって展開、実現されてゆくものである。この過程の中において減税と投資は有効需要の増加とならんで三つの推進力として経済成長をささえているといえよう。一方このようにたくましく成長する経済のワケ外において不幸に泣く人々の生活を助け、その立ち上がりに資するための社会保障はますます重要とならざるを得ない。減税と公共事業の拡充と社会保障の充実を新政策の三本柱とするのであるが、国家のあらゆる政策は、いずれも相互に密接な有機的関連をもつものであるから、全体のバランスを考えつつ実行してゆくつもりである^{三六}」と述べたが、会場でこれを聞いた高田は、おそらく国民年金制度をめぐる対立とその帰結を振り返りつつ、厚生省にとって受け入れがたい決定を主導した池田への失望をにじませて次のように評している。

池田さんの話を聞いて、^経聖済政策中心の考へ方がよく分つたやうな気がする。社会保障第一といつても、やはり本質的には^経聖済の循環からはぐれた者の救済程度にしか考へていないのではなからうか^{三七}。

池田内閣は十一月下旬の総選挙の勝利を経て、十二月、第二次内閣の組織にあたって内閣改造を行う予定であった、七月に第一次内閣が発足したばかりであるため小幅な改造に留まると見込まれていたが、中山は交代予想に含まれていた。しかも、十二月二日、厚生白書事件が発生し、早々に中山は「退陣同然の感」となってしまう^{三八}。

厚生白書事件は、『厚生白書』一九六〇年度版に掲載されていた社会保障費対国民所得比率の数字を見た池田が閣議で激怒したものである。高田は白書の「内容はちつとも間違っていないし、見當も違っていない。唯新聞のとりあげ方が多少誇張的だったし、^{池田厚相}総理の気になっている点に触

れたということであらう」と判断し、むしろ池田が「けちをつけ」たものとして批判的に見ていた。だからこそ、中山の更迭を当然視することなく、むしろ「こゝろ三日、新聞で改造人事をめぐり、中山大臣につらく当るやうな記事続き、いやな感じである」と同情さえ示している^{三九}。

6. 一九六〇年総選挙立候補者への厚生省の組織的支援

最後に、一九六〇年総選挙での厚生省出身者への支援についてである。この総選挙は、高田によれば「厚生省がその生えぬきものを力を入れて応援した」初めての選挙であった^{四〇}。

応援を受けたのは、新潟一区から立候補した小沢辰男である。小沢は一九一六年、新潟市にて真保家に生まれ、一九四一年三月、東大法学部を卒業して内務省に入省した。十二月に開戦後、戦時中は海軍省勤務となり、一時、ボルネオに派遣され、また同じ新潟市の小沢家に婿養子として入っている。敗戦後、復員して内務省に戻ったが、一九四五年十二月に厚生省に異動となり、衛生局、大臣官房、医務局、公衆衛生局、保険局で勤務したが、保険局健康保険課長に在職時の一九五八年十二月、厚生省から出向していた東京都の保険課長の不祥事の責任を取り、引責辞任して厚生省を去ることになった。一九五九年三月、同郷で厚生事務次官を退任後、日本赤十字副社長となっていた葛西嘉資の誘いで日赤に転じ、故郷新潟で在日朝鮮人の帰還事業を担当した^{四一}。

立候補に至るのは、この日赤に転じた頃から本格化していくようである。地元の政財界との関係が深くなり、選挙に出るよう求められるようになっていったという。もともと義父の小沢国治が敗戦直後に一期だけ衆議院議員を務めるなどの縁もあり、また本人も一九五二年総選挙への立候補を一時検討し、このときは葛西が立候補するために取りやめたが、その後も立候補の機会を窺っていたため、思い切りよく厚生省を辞めたという。義父（一九五九年死去）が議員引退後に支援していた北畠吉が一九五八年総選挙で落選して引退していたことも、小沢の立候補の

障害を減らす要因になったであろう^{四二}。

一九六〇年総選挙は十月二十四日に衆議院が解散され、三十日に公示日を迎えた。新潟一区では定数三のところ八名が立候補し、しかも自民党系が三名もいる激戦となり、小沢は、（後述の通り）公認どころか党籍証明さえ怪しい状況だったが、十一月二十日に投票が行われ、その開票の結果は一位に一〇七票差で肉薄する六四、〇六一票を獲得して、当選を果たした。

小沢は回顧録で最初の選挙を振り返ってお世話になった人々の名前を多くあげているが、そこに高田ら厚生省現職者の名前は含まれていない。高田の追悼録に小沢が寄せた一文^{四三}には、一九四九年、当時大臣官房事務官だった小沢に対して高田人事課長から医務局整備課長への内示を受けて以来の関係について記されているが、一九六〇年総選挙については、次の通り、曖昧に触れられているのみである。

私が昭和三十五年選挙に初めて立候補した時は、高田さんは官房長で、私の同期の熊崎・尾崎の両氏がそれぞれ会計課長・総務課長としてお仕えしておりましたが、高田さんが陰に陽に心配して下さったものと思いますが、両課長が私の選挙のことについて非常に心配して下さった。このため、以来私は当選を繰返しながらそのほとんどの間を社労で厚生省のために懸命に努めてきたわけです^{四四}。

この点、「高田日記」によれば、一九六〇年三月八日、高田がまだ薬務局長在任時に小沢の来訪を受け、「日赤をやめて立候補準備に専念する趣」と報告を受けていた。高田は広く親切的な性質であったが、この際にも早速、十四日に会合を設け、高田、小沢の他、次の事務次官となつた高田正巳社会局長、そして小沢の同期から熊崎正夫、尾崎重毅、三浦直男の五名が集まった^{四五}。会合の詳細は記されていないが、小沢の選挙に関する話合いであると考えてよいだろう。

高田はその後、基本的には小沢が記したように熊崎・尾崎らに「心配」

を委ねたためか、そう多く「高田日記」中に登場するわけではないが、小沢のために高田自身が取り組まなければならない問題として、先述の党籍証明問題があった。新潟一区には当時、現職の自民党議員として高橋清一郎、大島秀一の二名がすでにいたため、小沢は公認を得ることはできず、せめて党籍証明書だけでも得られないかと期待した^{四六}。

高田は小沢のため、解散前の十月十日、「党本部に前尾氏及び大橋氏を訪ね、小沢君の党籍証明書のことと懇談」し、その日のうちに小沢と会談しており、党籍証明書が得られることを期待していたようである。ところが、解散後の二十五日になって「小沢辰男の党籍証明の件、あやしくなった」ため、「五時から六時まで大平長官、大橋氏、益谷幹事長に會い、相談を行っているが、二十六日には「小沢君の党籍証明問題、相当困難な見込みが判明してきた」と記すほど悲観的な情勢になっていた^{四七}。

小沢の公認や党籍証明には、当然、現職やその所属する派閥が反対していた。例えば、高橋は河野一郎の派閥に所属しており、小沢が回顧するところでは、立候補の決意後、東大・内務省同期で先に衆議院議員になっており、河野派に所属する中曽根康弘に出くわしたところ、痛烈な批判を浴びせられたという^{四八}。

しかし、高田の働きかけが実ったためか、公示初日を過ぎた十一月三日、ようやく小沢に党籍証明書が交付されることになった。その慌ただしさ、有り難さを、小沢は「いよいよ公示になり、立会演説会が佐渡を皮切りに始まることになり、宣伝カーも運んで両津港に着いた。その時なんだ、「党籍証明が出た」と連絡が入った。すぐ看板に「自民党」と書いた」と記している。党籍証明書の交付決定の際、高田は十月三十日から十一月六日まで九州・関西に出張のため不在であったが、六日夜に帰京すると、七日午前中のうちには、「党本部に益谷、大橋、前尾の三氏（辰男）に小沢君党籍証明発給の件礼をいう」とお礼の挨拶周りを行っている^{四九}。

この他、高田は自ら応援に赴いた。十月三日から七日まで、富山・新

潟に出張しているが、新潟出張は「小沢君の選挙関係が一つの目的」で、会合を開いてくれた薬業関係者に「暗に小沢君のことども語」り、「今日の参會者同氏のため大いにやるという氣組顯著」と手応えを得ていた。さらに、十一月十二日午前には大橋武夫が小沢の応援に赴くことが決定し、十二日には「午後、小沢君の応援のため新潟に行った大橋武夫氏を羽田に迎へ車中打合せを遂げる」など緊密に連携していた^{五〇}。

高田らが、言葉の通りひじょうに力を入れて小沢を支援したことが分かり、そのため、当選の喜びはひとしおだったろう。投票票日の二十日にはラジオの開票速報を聴取し、日付の変わる頃に当確が出ると、即座に小沢のもとに電話し、祝意を伝えようとした。二十一日「朝登廳すれば、小沢当選で省内非常に明るい。厚生省がその生えぬきのものを力を入れて応援したのははじめてだっただけに大きな喜びだった」。そして、「午前党本部に、益谷幹事長、大橋副幹事長、前尾氏等を訪ね、当選の祝詞と、小沢君の事についての礼を述べ」たのであった^{五一}。

小沢当選後の問題は、どの派閥に所属するかを決定することであった。小沢は後に同一県内選出の田中角栄の側近として名を馳せ、回顧録によれば、初当選の際にも田中と関係があったようではある。しかし、出馬の際には池田派に所属するか、佐藤派に所属するかは必ずしも明瞭ではなく、池田・佐藤両派から応援をもらっていることを佐藤派の木村武雄から皮肉られ、気まずい思いをしていた。このあたりは、「高田日記」九月二十八日に「小沢辰男氏、池田派でゆくか佐藤派でゆくか迷っている」とあることと対応している^{五二}。

ただ、最終的に池田派所属になったことについて、「宏池会・池田派の方が肌に合っていたのかな、そちらに落ち着くことになった」としているが、これは「高田日記」に選挙後の十一月二十五日条中「小沢辰男君来訪。正午過ぎ黒金氏来り、三人で小沢君の派所属問題懇談」とあることからすれば、やや簡略化した話であろう^{五三}。しばしば大平や黒金が「高田日記」中で言及されるように、池田派の有力者である彼らがもとより親しく、党籍証明書交付にあたって、高田から益谷幹事長、大橋副

幹事長、前尾という池田派の幹部でもある人々に依頼しているのも、(益谷らが役職上選挙の責任者であることであることから当然だとはしても)高田が池田派の面々と親しかったことを抜きにしては考えられまい。こうした高田の關係が、小沢の池田派所属の決断に影響を及ぼしたと考えるのが自然ではなからうか。

7. おわりに

今回の翻刻にあたっては、前回同様、城下が中心となつて行った。非常勤講師として出講している立命館大学の大学院生から、前回翻刻に引き続き木多悠介、海野大地の協力を得るとともに、新たに田中将太、落合優翼、中村凌太郎も参加して翻刻のための研究会を開催した。二〇一九年三月から七月までの間に計六回の研究会を開き、草稿を作成した。この草稿を、八月から十月にかけ、鹿島晶子が見直し、その後十月中に、城下が木多とともに最終稿を完成させた。

今回も、高田の御長男である高田禎浩氏御夫妻には、聞き取りやメールでさまざまな御教示を賜り、また激励をいただいている。暖かい御理解、御支援のお蔭で再び翻刻を発表することができ、末尾ながら改めて御礼申し上げたい。

- 一 「高田浩運関係文書」三十二(一部)、国立国会図書館憲政資料室所蔵。
- 二 城下賢一、木多悠介、小林愛恵、海野大地、鹿島晶子「厚生省薬務局長日記」「高田浩運日記」一九五九年七月～一九六〇年六月『大阪薬科大学紀要』十三号、百五十五～二百十頁。
- 三 高田浩運追悼録刊行会編(一九七八)『追想 高田浩運』同会、略歴。
- 四 牧原出(二〇〇三)『内閣政治と「大蔵省支配」中央公論新社、第一章。
- 五 第二十六回国会内閣委員会、昭和三十三年三月五日、「国会会議録データベース」、<http://kokkai.ndl.go.jp>。
- 六 有岡二郎(一九九七)『戦後医療の五十年 医療保険制度の舞台裏』日本醫事新報社、第三章。
- 七 同右。「高田日記」一九六〇年六月二十三日条。
- 八 「高田日記」一九六〇年七月二十一日～二十三日、二十五日、二十六日、八月十九日、二十日各条。

- 九 「高田日記」一九六〇年八月二十四日、二十五日各条。
- 一〇 「高田日記」一九六〇年八月二十五日条。
- 一一 有岡、前掲『戦後医療の五十年 医療保険制度の舞台裏』第四章。
- 一二 「高田日記」九月二十二日条。
- 一三 「高田日記」九月二十三日条。
- 一四 「高田日記」一九六〇年十月二十五日、十二月一日各条。
- 一五 「高田日記」一九六〇年十二月十日条。
- 一六 「高田日記」一九六〇年十二月十一日、十六日各条。
- 一七 山本浅太郎「保険局長のころ」森本潔氏追悼録刊行事業会編『森本潔さん』同会。
- 一八 「高田日記」一九六〇年十二月十二日条。
- 一九 「高田日記」一九六〇年十二月十三日条。
- 二〇 副田義也(二〇一四)『生活保護制度の社会史』増補版、東京大学出版会。
- 二一 「毎日新聞」一九六〇年七月二十二日付朝刊三画。
- 二二 副田、前掲『生活保護制度の社会史』。
- 二三 「朝日新聞」一九六〇年七月二十九日付朝刊四面。
- 二四 最終的には十八%増で妥結したが、これは従来に比して大幅な伸びであった。『厚生白書』昭和三十七年度版、第七章二。
- 二五 「高田日記」一九六〇年十二月一～三日各条。
- 二六 「高田日記」一九六〇年十月十九日条。
- 二七 「高田日記」一九六〇年八月六日、八～十日条。
- 二八 「高田日記」一九六〇年七月十九日条。
- 二九 「高田日記」一九六〇年七月十九日条。
- 三〇 「厚生白書」一九六〇年度版、第二章第一節。
- 三一 同右。
- 三二 「高田日記」一九六〇年八月十九日、九月二日、同三日各条。
- 三三 「高田日記」一九六〇年九月三日条。
- 三四 「高田日記」一九六〇年九月二日条。
- 三五 「高田日記」一九六〇年九月三日条。
- 三六 「読売新聞」一九六〇年九月八日付夕刊二面。
- 三七 「高田日記」一九六〇年九月八日条。
- 三八 「高田日記」一九六〇年十二月二日条。
- 三九 「高田日記」一九六〇年十二月二日、三日各条。
- 四〇 「高田日記」一九六〇年十一月二十一日条。
- 四一 小沢辰男述(二〇〇一)『愛郷無限 小沢辰男とその時代』新渕日報事業社、第一、二章。
- 四二 「朝日新聞」一九五九年三月五日付朝刊一面、同六日付朝刊五面。
- 四三 小沢、前掲『愛郷無限 小沢辰男とその時代』第三章。『毎日新聞』一九五九年八月七日付朝刊二面。
- 四四 小沢辰男(一九七八)「三十年のお付き合い」高田浩運追悼録刊行会編『追想 高田浩運』同会、三四九～三五三頁。
- 四五 同右、三五一～三五二頁。

- 四五「高田日記」一九六〇年三月十四日条。
- 四六小沢、前掲『愛郷無限 小沢辰男とその時代』第三章。
- 四七「高田日記」一九六〇年十月十日、二十五日、二十六日各条。
- 四八小沢、前掲『愛郷無限 小沢辰男とその時代』七十四頁。
- 四九「高田日記」一九六〇年十月三十一日、十一月七日条。
- 五〇「高田日記」一九六〇年十月三十一日、十一月十二日条。
- 五一「高田日記」一九六〇年十一月二十日、二十一日各条。
- 五二小沢、前掲『愛郷無限 小沢辰男とその時代』七十頁。「高田日記」一九六〇年九月二十八日条。
- 五三小沢、前掲『愛郷無限 小沢辰男とその時代』七十四、七十五頁。「高田日記」一九六〇年十一月二十五日条。

「高田浩運日記」一九六〇年七月～十二月

翻刻・城下賢一、木多悠介、海野大地、田中将太、

落合優翼、中村凌太郎、鹿島晶子

凡例

- 一 原史料では、改行について判然としない箇所があるが、原史料の改行を尊重しつつ、内容が連続していると思われる箇所については改行せずに翻刻している。
- 二 原史料では、句読点が区別されずに表記されており、また省略されている箇所も多い。このため、史料の文脈に沿って句読点を判別し、また一部補っている。
- 三 原史料では、新旧の漢字が混在して使用されているが、原史料の表記に従って翻刻している。
- 四 原史料では、同一の語句についても、捨て仮名（小書き文字）での表記と通常の仮名での表記が混在しているが、これらは全て捨て仮名（小書き文字）での表記に統一している。
- 五 原史料中、一部の判読不明な文字は□で示し、推定の候補がある場合には添字で示した。
- 六 原史料では、内容を消去し、書き直した箇所がある。その場合には、なるべく消去された語句も翻刻した上で二重打ち消し線によって消去箇所であることを示し、訂正された語句があればその後に記載している。消去された語句が判読不明な場合には□とした上で二重打ち消し線を引き、推定の候補がある場合には添字で示した。

■一九六〇（昭和三十五）年七月

◎七月一日（金）晴

午前、午後、各局の懸案事項説明を聞く。

夕、謡の稽古。

◎七月二日（土）晴

午前、保険局長等と医師會との関係打開方策につき打合せ。

正午から総理官邸に於て六・四統一行動に伴う、職員処分問題につき各省官房長会議。

◎七月三日（日）晴

午前テニス。午後多少頭痛で休養。

◎七月四日（月）晴

正午から次官會議に次官の代りに出席。

午後、防衛廳人事局長を訪ね、衛生局長人事で打合せ。

◎七月五日（火）曇

正午から定例の局長會議。會議後、医^{〔務〕}ム社會両局の懸案事項説明聴取。

斎藤惣一氏今朝死亡。夕、御通夜にゆく。

◎七月六日（水）晴

防衛廳衛生局長人事、輕部氏轉出に決定して一段落。

午後次官中心に重要政策検討。

午後六時から記者クラブのメンバーを次官以下各局長で招待、歓談。

◎七月七日（木）晴

斎藤惣一氏の叙勲のことで賞勲部長及び、佐藤副長官訪問、交渉。

正午過、車庫長坂口氏〔房〕の告別式に出席。

午後、重要政策検討。

夕、政調喜多氏〔總〕と懇談。

◎七月八日（金）雨

残っている法案の審議促進に関し、国会方面に高田次官とともに運動。

午後五時からホテルニュージャパンに於て、薬業関係団体で新田次官〔高田次官、牛丸義留〕、薬ム局長等の歓送迎会あり、出席。

◎七月九日（土）晴

午後一時から薬業会館に於て、高田次官を中心に、森本〔森〕、太宰〔博〕、黒木〔利克〕、山本〔山本浅太郎〕、館林〔宜夫〕の諸氏と會同。

保険局長と医師會との意見調整につき、準備諸打合せを行う。僕は〔渡邊良夫〕現大臣のもとでの話を急ぐことなく、新大臣待ちの考へ。四時半散会。

◎七月十日（日）晴

おひる、上野精養軒に唐木田氏〔藤五郎カ〕主催の藤寿会に。

午後二時から三時過まで、青山学院に於て、斎藤惣一氏の葬儀に出席。

◎七月十一日（月）

午前十時から自民党の両院常任委員長會議。明日、本會議及び委員會を開くか否かにつき論議あり。川島幹事長〔正次郎〕、福永国対委員長等〔健司〕は慎重論のにはいが強かったが、常任委員長側は法律をかたづけたい意向から明日の會議を開く事を強く主張。特に永山委員長〔忠則〕最も強硬。結局開會の態勢をとることに決定。十一時半散会。

尔後、午後そのたの委員會開會に伴う、諸般の準備を進める。
夕、高田次官〔正巳〕が、石原主計局長〔周夫〕以下を招待、陪席。

◎七月十二日（火）晴

十時から衆参両院社労委開催の予定だったが、定足数足りず委員かり集めに手間どり十一時頃開會。僕は衆議院側にいたが、原爆被爆者医療法改正案外五件一鴻千里〔鴻〕で可決。十二時前閉會。本會議待ちとなったが、本會議は両院とも遂に開かれなかった。尚参議院社労委は右の法律につき予備審査。

正午から定例の局長會議。

五時半から第一公邸に於て、安田〔蔵〕、河野〔鎮雄〕、輕部氏〔弥生二〕の送別会。

◎七月十三日（水）晴

朝、林讓治氏宅にゆく。恰度今日が、百ヶ日であった。

十時から自民党大會で総才選挙〔義〕の予定なりしところ、今朝大野氏〔伴雄〕の立候補辞退〔光次郎〕石井氏に一本化で情勢混乱、遂に議事に至らず明日に持ち越し。国会対策も情勢待ち。

◎七月十四日（木）晴

今朝から自民党大會。決選投票で池田勇人氏新総才〔龍〕に當選。

正午、東京會館に医学講座、短波放送二〇〇〇回記念の昼食會に出席。
午後五時から砂防會館ホールに於て本田トヨ女史ブラジル行きの壮行會に出席。

◎七月十五日（金）晴

國會に於て、首班指名をやるか否か、法案の審議をやるか否か、状況混〔池〕とんとして不明。午前ら國會に出かけ、或は動きまわり、或は待機。五時頃に至り、三頭首會談の結果、首班指名は十八日招集の臨時國會で、法案は出来るだけ今日の本會議に於てということに方針決定。八時半から両院本會議開かる。衆議院で薬事法案等を含む六件一鴻千里〔鴻〕で上り、ついで参議院社労委で原爆医療等三件を上げ、医療法一部改正案を継続審議に。やがてこれらは本會議で決定。十一時近く終了。尚、医療法改正案は衆議院側は今日中に可決してしまへとの主張に対し、参議院側は、

これに反対で最後まで一悶着あつた。
午後六時、赤坂プリンスホテルに於て故河合亀太郎氏の一週忌の會合あり出席。

◎七月十六日(土) 晴

昨日あたりから三十三度を越しいよ／＼盛夏。

午前、國會に、永山、^{〔忠則〕}加藤氏らを訪ね、挨拶をする。

正午から靖国神社奉賛會の招きでホテルニュージャパン。
今日両国の花火。

◎七月十七日(日) 晴

午前、^{〔逸夫カ〕}村上君来訪。

午後テニス。

◎七月十八日(月) 晴

今日臨時国会招集。新首班に^{〔勇人〕}池田氏指名。

午後、厚生省の新政策種々打合せ。

◎七月十九日(火) 晴

昨夜は夜おそくまで組閣でラジオを聞いたり、それに伴つて^{〔高田正巳〕}次官等と打合せをしたりして深更になった。

十時過ぎたつたか、N・H・Kの中尾氏から厚相は中山マサ女史らしいとの電話でこれはえらいことになったと思つてゐるうちに、だん／＼確實になつてきた。差当り明日のことにつき^{〔今村謙〕}人事課長、次官と打合せ。

今朝次官は九段宿舍に中山新大臣を訪ねた。僕は少し早めに登廳。^{〔マコ〕}※十時過に首相官邸にゆき中山大臣に會ひ、當面、記者會見等で出るやうな問題についてのメモを渡し、説明。

十一時一行は、認証式のため宮中へ。午後一時過中山新大臣、厚生省記

者クラブへ。大変なカメラマンである。約三十分にしてフジテレビへ。今日は一日中テレビとか、ラジオとか。

午後三時から都市センターで、^{〔雄〕}喜多氏と厚生省新政策につき打合せ。こちら側、僕のほか、^{〔康〕}大崎、^{〔重政〕}尾崎両氏。午後六時まで。

〔上欄外〕

※^{〔正芳〕}大平官房長官に會つた序でに政ム次官は余程しつかりした人をもつてこなくては困るぞといったら、すまん／＼選挙やらねばならんでねえと。

◎七月二十日(水) 晴

暑さ格別。

十時過ぎから衆議院社労委繼續審ギ案件等決定。十一時、^{〔議〕}新田大臣事ム引継。ついで五階講堂で廳員一同に対する^{〔達良夫、中山マサ〕}両大臣の挨拶。講堂内超満員。はじめての婦人大臣とあつてマスコミ、大入り。大変なものだ。両方とも仲々愉快ななごやかな挨拶だった。午後五時、^{〔高田正巳〕}次官とともに、渡辺前厚相宅に挨拶にゆく。

五時半からビタミンAD協會の^{〔務、高田治雄、牛丸義留〕}新田藥ム局長の歓送迎會に出席。

◎七月二十一日(木) 晴

社会保険支拂基金理事選任の問題で医師會、病院協會の推せん問題がある。この点先日から検討。今日も、午前、午後とも。尚、^{〔藤〕}森本局長、^{〔義留〕}牛丸局長の外部接觸もはじめる。

午後六時、新庄君の東京轉勤を機として、五高のクラス會。ニューアサヒにて。

七時、^{〔瑞雄〕}福岡君、熊本縣藥ム課長として赴任のため出発、見送る。

◎七月二十二日(金) 晴

政ム次官、兩院の常任委員長定まる。政ム次官は^{〔務〕}田中正巳氏、衆議院委

員長は、大石武一氏、参議院は吉武恵市氏。

田中政_(務)次官一時半登廳。記者會見。午後四時から基金理事問題につき打合せ。

◎七月二十三日(土) 晴

十時過、国会へ。参議院社労委理事選任。

そあと、政_(務)次官になった人達に対し、挨拶廻り。

午後、田中政_(務)次官、医師會長に會ひ、基金理事問題につき交渉。

◎七月二十四日(日) 晴

恭子一昨日から、祥三昨日から横浜の本山実君宅に海水浴に出かける。

買物に出かける。

◎七月二十五日(月) 晴

基金理事問題未解決。

北鮮帰還協定延長問題。

午後四時から賀屋_(典宣)圣済研究所に。

六時、薬業士會の會合に。

◎七月二十六日(火) 晴

午前午後大臣、政_(務)次官に対する事務説明。

基金理事候補者提出依頼、日医、日病以外の団体には出す。

正午から定例の局長會議。

◎七月二十七日(水) 晴

午前十時から午前、午後引き続き、事務説明。

午後五時半、尾崎紀念館に於て、川崎秀二氏が世話役で中山厚相を囲む

歴代厚生大臣の會あり、陪席。広瀬_(久忠)、松村_(謙三)、一松_(定吉)、山縣_(勝見)、小林_(英三)、川崎の

諸氏會同。昔話に花がさき、中山厚相を激励。当方、田中_(正巳)、高田_(正巳)両次官

をはじめ、熊崎_(正大)、尾崎_(重敏)、今村君も出席。七時過散會。

◎七月二十八日(木) 晴

暑氣続く。

午前午後大臣への事務説明。

野田卯一氏、周東氏_(英雄)に會ひ、予算問題懇談。

五時半、園口氏_(忠男)、城野氏_(勇)(田端国鉄病院院長)に會ひ、城野氏の令嬢と

山下君の縁談のこと話す。双方ともりの氣故、進めることにする。

◎七月二十九日(金) 晴

朝三越にゆく。洋服の注文。

総評傘下の自労その他の各團體のもの数百人厚生省に陳情にむしかける

ので十一時から門を閉す。

午後一時頃彼ら集合。かねての打合せにもとづき、代表者少数を入れ、

まづ、第一會議室で国民年金問題につき話し合ひ、中山大臣も約小一時

間出席。そのあと小山_(進次郎)年金局長で。午後思ったより全般的に平穩に過ぎ

た。

午後五時歯科医師會。

午後六時、雪村で大臣、政_(務)次官の記者クラブ招待。

帰りおそくなる。

◎七月三十日(土) 晴

正午、東京會館における、武見_(太郎)医師會長の、中山大臣_(マサ)、田中_(正巳)次官の歓迎

の昼食會に陪席。

午前午後、来年度予算要求の概要につき會計課長より説明聴取、検討。

午後七時まで。

◎七月三十一日(日) 晴

午前、テニス。暑さ格別。

午後疲れ相當。

■昭和三十五年八月

◎八月一日（月）晴

来週、政調會に説明すべく、各局の事項を集める。

正午、次官會議に、^{（高田正巳）}次官の代りに出席。

政調社會部長、^{（貞善）}八田氏に會見。

◎八月二日（火）晴

暑氣格別。

午前、政調への説明事項調整。

正午、朝日新聞社に土屋清氏を訪ねる。

午後、賀屋委員會に^{（正巳）}高田次官出席。そのあとの調査等検討。退廳七時過。

この頃より可なりの雨。一息つく。

◎八月三日（水）晴夜雨

薫及び、禎浩、祥三三人昨日から山中湖の富士荘に出かけた。僕も昨日

一しよ^{（緒）}に出かける積りだったが仕事の都合で一日延ばし今朝七時半新宿

發御殿場行き小田急でゆく。十時過ぎに富士荘につく。暑氣去り秋冷の

感別天地。

午後、湖で水泳。夜静かなり。

◎八月四日（木）晴

午前、勉強。

午後、車で五湖めぐりに出かける。本栖湖の景はよろしきも、見る程に、聞くほどもなし。五湖めぐり午後四時過の帰着。

◎八月五日（金）晴

午前、一寸馬にのる。

午後水泳。

◎八月六日（土）晴

午前、薫と、ゴルフ場^{（ルコ）}まで歩く。可なりの巨離である。午後泳ぐ。や、

涼し過る。

夕、^{（正巳）}高田次官一行家族らも四人来着。夜、僕の留守中の仕事のこと等につき話し合う。

◎八月七日（日）晴

午前、水泳。

十一時過出發、帰途につく。御殿場發〇時二十三分。三時近く家に帰着。

暑氣格別。

◎八月八日（月）晴

午前十時から政調社會部會に各局^{（マ）}毎、予算案説明。議員側集まり悪かった。

社會、葉^{（務）}ム、医^{（務）}ム、保險、公園すみ、三時半頃閉會。

午後六時から日本W H O クラブの發會式。上野精養軒に於て。

◎八月九日（火）晴

午前十時から昨日に引続き社會部會への説明。公衆衛生、児童、年金。

午後三時から党本部に於て、社会保障特別委員會、いわゆる賀屋委員會、^{（興宣）}

初總會。賀屋氏の見解披露あり。五時頃終了。

昨日今日政調へ説明の新政策厚生省案、先週土曜、大崎君^{（康）}からクラブに

レクチャーのところ、はじめ幹事側と協定せるところに相違し、明日の

朝刊に一せいに記事になることが、昨日来明らかになり、困った事になった。

中山大臣、田中政^{（正巳）}ム次官へ予め断りをいうとともに内閣の小川副長^{（平三）}

官にも経緯を話す。夕刻、田中次官心配し、特に生活保護※

〔上欄外〕

※基準二六%増という具体的数字が出ることは困るという見地から何とかその分だけでも差しとめようと、六時近く、クラブに行つて朝日永井氏らと懇談し、大体了解を得不在の他社には電話で連絡してもらひたいとの事につき各社次々連絡半分位はこれとまゐるかなあと思う。七時頃ホテルニュージャパンにゆき、政調社会部會の有志會同。新政策聴取後の党政策にもるべき事項検討の結果を聴く。

◎八月十日（水）晴

午前十時から自民、社会部會、開會。

十一時、衆議院社労委。

午後三時半、都道府縣會館□厚生共済會發會式。これは医ム局国立病院、療養所関係職員の共済會。僕が、医ム局次長時代に梅本君らと発想したが、機熟せず発起に至らなかつたもの。草葉隆田氏會長。ついで総り官邸に自治省開設紀念パーティー。

午後六時、星ヶ岡茶寮に、中山厚相が衆議院社労委メンバーを招待。

八時頃散會後次官等と政策打合せ。

先々週、記者クラブ幹事側と話し合ひの上とりきめ、先週末大崎企画室長よりレクチャーした重要政策（政調社会部會に説明せるもの）が各紙ともそろつて今日の朝刊に大きく出ている。且つ、昨夕手配した生活保護基準、二六%引上げの差止めも効果なく、毎日以外殆んど皆記事にしている状況。

早速今朝の社会部會では大目玉をくつた。

大臣、政ム次官にはそれ〴〵断りをいう。

〔上欄外〕

毎日は昨夕橋本記者に連絡し、彼はこれを守つて数字をカットしてくれ

たのに、蓋をあけてみれば他社は何れも出している仕義で彼は憤慨。今日日本人に會つて了解を求める積りだったが、會へず。翌日會つて経緯を話し、了解求めた。

◎八月十一日（木）晴

十時から参議院社労委。

これに先立ち、総理官邸に於て全国知事會議。十時中山厚相の説示につき立ち會う。

参議院社労委では、昨日の新聞の厚生省の新政策が問題で一波瀾ありそうだったが、大臣の釈明でけり。

午後三時から赤坂プリンスホテルで知事會と大臣との懇談會。中山厚相とともにゆく。五時近く終了。

五時から上野精養軒で薬剤師會等業関係団体による薬剤師法、薬事法制定記念のパーティーにあり、おくれて六時半頃出席したところ、既に概ね終了していた。

七時過から赤坂金龍で政調喜多氏と、大崎君と三人で先般来の説明に基く党の新政策につき喜多案を検討。午後十一時散會。

◎八月十二日（金）晴

十時から政調社会部會。先般来懸案となつていた、結核対策、生活保護等につき説明。

午後一時半賀屋委員會。右と同様の説明。どうも両委員會がダブつて困りものである。大橋武夫氏が見えて生活保護につき賀屋委員會の進み過ぎを牽制していた。四時近くまで。

このところ連日、會議〴〵で草臥れた。謡も休む。

◎八月十三日（土）曇

午前十時から社会部會。喜多氏起案の案につき一同検討。結核の高額負担の点と生活保護の二点につき保留。月曜に厚生省の意見を述べること

にして正午頃散会。午後右の二点につき省内で検討。
夕、洋服の仮縫に三越^(三越)しに。
台風来のけは^(気配)ひにて風雨荒れ模様。

◎八月十四日(日) 雨

終日降雨。気温低下涼味しるし。

午後昼寝快し。

夜、山瀬茂運君来訪。

◎八月十五日(月) 晴

午前から午後にかけて、結核、精神の特別公費負担の問題に関し、新政策上如何なる案でゆくか、検討。一つの案は、国保の七割給付へ引上げと、自己負担分の公費負担を両方もつてゆく案。他は、国保につき結核精神のみ七割給付とする案。仲々に何れとも決し難し。

おひる、次官會^(議)ギに出席。

午後三時から社會部會、次官^(高田正巳)とともに出席。右の問題につき論議した結果、結局後者の案におちついた。五時頃閉会。

帰廳後、田中政^(正巳)次官に報告せるところ、多少不満。前者の案に氣持が傾いていたのである。

そのあと、關係局長に傳達。細目につき打合せ。九時近く退廳。

◎八月十六日(火) 晴

昨夜の新案に基き計数検討。おひる近く八田社會部長等に報告。

午後一時過から政審へ。社會部長より、案を説明。二三の点につき質問あり。あっさりと終了。

夕刻、社會部會案を中心として、予算対策等次官^(高田正巳)中心に打合せ。

今日社會部會終了で連日忙しかったのもやっと一段落。

◎八月十七日(水) 晴

午前十時賀屋委員會に出席。結核精神病に関する新らしい案につき説明。概ね、了解を得たものと思う。午前だけで辞去。

午後小田急の利光洋一氏来訪。

記者クラブの幹事と會つて、先般の厚生省新政策発表問題につき、^(註) 聖緯を話し合ひ相互の誤解のない様にする。

六時から血液銀行協会の送別會に出席。

◎八月十八日(木) 曇

午前^(分脱)から予算省議の準備として會計課長の査定意見につき次官^(熊崎正夫)中心に検討。

一方、生別母子家族への手当支給の問題につき児童局側と検討。

夕方、黒金氏^(泰美)に會ひ、政調會の今後の見透につき聞く。又、拠出年金についての党内の反対意見につき状況を聞く。この事については小山君^(進次郎)と打合せ対策改定。

夜も予算を検討。十二時近くになる。

◎八月十九日(金) 雨

朝中山厚相^(マサ)を宿舎に訪ね、拠出年金問題につき池田総理に既定方針通り進む旨を云つてもらう様話す。これは、昨日黒金氏^(泰美)の話で保利、益谷^(秀次)、池田三氏集つたところで保利総^(務)會長から拠出制度、延期の要を話した

ところ池田首相が或程度同感の相づちを打つたとの情報に基き必要な^(措置) そちと考へたものである。閣議後、話をした旨、中山厚相から報告を受く。

正午から大臣室で顧問會議。小汀、植村^(利得)、三好、永沼^(中十郎)の四氏とも出席。

午後二時過、小山局長とともに内閣に、太平官房長官、小川副長官^(平二)を訪ね、年金問題につき話す。

一方、診療報酬支拂基金理事の推せん問題、先般来、党の山中貞則氏に^(武見太郎) 医師會長との間あつせん方依頼してあつたが、山中氏から保険局長に、厚生省の思うやうにやれとの電話ありし結果に基き、既定方針通り前回の^(措置) 通りのそちをとる様決定。その線で必要の手續をとる。内閣の太平、小

川両氏にも医師會との間に摩擦あるべきもやむを得ざる旨了承を求め
る。

午後予算問題検討。夕方七時まで。

熊本の犬塚勇太郎氏逝去の報あり。

◎八月二十日(土) 雨

颱風十四号接近で風雨。

午前十時から賀屋委員會より政調にその決議報告。大崎君をやる。^(興宣)

午前、児童局の生別母子家庭への手當支給の制度につき検討。

十一時半から局長会議。内閣に報告すべき新政策につき検討。

午後、次官中心に機構改革問題につき検討。^(高田正巳)

社会保険支拂診療報酬支拂基金理事の推せんにつき森本保険局長、^(橋本寛敏) 日病會長、^(武見太郎) 醫師會長に會見。後者は決裂の様相の様。

◎八月二十一日(日) 晴

夜の颱風も大した事なく明くれば、好天。東方海上を北進の様子。

午前午後、台所の修理。祥三とともに。

暑氣ぶりかへす。

◎八月二十二日(月) 晴

内閣に提出する新政策要綱の調整を急ぐ。

午後おそくから予算省議を前にしての機構改革問題につき次官中心に打
合せをとげる。夕方おそくなる。^(高田正巳)

◎八月二十三日(火) 晴

午後プリンスホテルで大臣、^(中山マサ) 兩次官に対し、予算省議の準備として重
要問題につき會計課長より説明打合せをとげる。午後九時頃まで。^(熊崎正夫)

午後四時半から高田次官より、^(大平正芳) 官房長官に対して新政策説明。大崎君同
行。^(康)

◎八月二十四日(水) 曇

午前十時から大臣室で予算省議。今回は進行早く、午後十時半頃までに
児童局まですむ。

社会保険診療報酬支拂基金の理事問題。一兩日前より党の空氣変化。医
師會側に傾き、今日、医療特別委員會(會長山中貞則氏)で、一、甲乙

一本化をいそぐこと、二、基金理事問題は明日中に解決すること、三、

基金理事問題、従来の^(経) 聖澤像白紙に返すことの三点を定めたとか。尤も

田中政次官出席していて、第三項については従来のゆきが、りにこだ
わることなくという意味に訂正したとか。右の様な次第で党側から厚生

省に要求あり。尚、理事問題については、日病への推せん依頼を撤回す
ることはなさず、一名重複方式をとるが、醫師會側の推せんを日病側に

のませることとまとめようというわけである。非常に難かしい事態であ
る。夕刻、田中政次官が醫師會に武見氏に會ったがその節もってか

へった醫師會の推せん者二人とも北海道のもので一名は日病メンバーに
非ず、一名はメンバーなるも乙表でとても日病側がのめるものではない。

最後の事態に対処する方針だけ打合せて今日は別れた。

◎八月二十五日(木) 曇

午前十時半から予算省議再開、午後五時半頃終了。総額二七〇〇億余で、
八百億には達しないか。

基金理事の件、朝田中政次官山中氏らを仲介にして武見氏と會見、名
簿の変更を求め、東北大古賀附属病院長か、^(菅政夫) 荒垣立川病院長をもつてか

へった。前者にきめ、森本局長、^(橋本寛敏) 日病會長に交渉、一応了解を得る。

帰廳ひそかに喜びを分ったところが、一時頃醫師會側から右の者推せん
の旨発表ありしとかで、日病はじめ七團體側、醫師會案を厚生省が吞ま
したとの考へで憤慨。厚生省におしよせ、事態逆轉。推せん拒否の態度
を見せた。次官、^(森本深) 保険局長省議終了後関係者説得に努力。

◎八月二十六日(金) 晴

省議もすみ大風一過の形。終日閑散。

午後一時、予算省議決定内容を新聞発表。

疲れているので謡をやめ早く帰る。

◎八月二十七日(土) 晴

暑さぶりかへす。

昨夜黒金氏より電話あり、十一時、プリンスホテルに単身来てもらひたい、政調會の幹部で新政策について意見をき、たいからと。先方の出席者は坊、高橋衛、黒金の三氏と。

予算問題を含むと考へ、早々に次官と腹づもりにつき打合せを遂げ、十一時過、指定の場所にゆく。生活保護、国民年金、国民健康保健、等につき懇談。取捨の順序等につきこちらの考へ方をき、たいといのが、先方の考への様に思はれた。或は黒金氏がこういう機会をもつ様にとりからはかつてくれたのかもしれない。結論的には、向うの考へているのと同じような違ひはなかった様だし、非常によく分つたと礼をいはれた。終つて、自分の思い付として、首相の来月の遊説中一ヶ所か二ヶ所、養老院か、精薄、肢体不自由児等の施設を、予定に組まないで、首相の思ひつきの様な恰好で訪ねられたら如何と提議したところ、皆それはい、と大乗気。

午後一時半近く辞去。

午後三時頃から上野の美術館に書道展をみにゆく。

午後五時新橋演舞場に芝居を見にゆく。ラヂオ東京の小島君から切符もらつたもの。九時終了。

◎八月二十八日(日) 晴

朝から暑気格別。終日ごろく。

午後、大西、山崎両氏来訪。

祥三一昨日より発熱。仲々に下らない。

◎八月二十九日(月) 曇

颱風の前ぶれにて時々雨、時々風。

午後一時、自由労務者約千人陳情のため来省。多少あばれる。

午後、生別母子家庭の手当の問題打合せ。

◎八月三十日(火) 晴

ポリオ対策閣議で決定。

正午から定例の局長會議。

午後三時から都市センターに於て、各社論説委員に対し、予算要求案説明。

午後六時から町村会館七階に於て亀山孝一氏還暦祝賀會。塩田先生、広瀬久忠氏以下二百数十名の多数出席。仲々愉快的な會合であった。七時半頃散會。そのあと、高田、中西両次官外世話人關係少数の者にて亀山夫妻をかこみ、福田屋で二次會。

◎八月三十一日(水) 晴

朝黒金氏から政調會側の政策とりまとめ状況を聞く。十一時から賀屋氏と懇談の旨を聞き、その頃高田次官、賀屋氏を訪ね要望。午前、田中伊三次氏、高野一夫氏を訪ねる。

午後、保険局關係医師會對策打合せ。

夕、五時半から、藤本捨助氏、次官以下各局長をプリンスホテルに招待、出席。

■昭和三十五年九月

◎九月一日(木) 晴

今日、党主脳、新政策打合せにつき、おひるから中山大臣、幹事長、官房長官等首脳者を歴訪。社会保障の件とりあげる様依頼。

午後亀山孝一氏を訪ねる。

帰途、千駄谷の都屋内水泳場で水泳。かなりの混み。

夜雷雨。

祥三、昨日あたりから平熱。

◎九月二日(金) 晴

正午から定例の官房課長会議。

午後二時から各新聞社婦人部家庭欄記者を松本楼に會同、来年度政策及び當面の年金問題説明。

五時過、次官から、賀屋さんからの電話で、国民年金の所得制限緩和、生別母子の二点につき厚生省側からも努力する様にとの話だったということ聞き、黒金氏に秘書を通じ連絡とったところ、軍人恩給との併給がとりあげられて、所得制限緩和等アウトということが分った。然もこれは総理の発言によるらしい。これは最悪の才定である。官房長官に次官から事務當局の考へを傳へ、一方、中山大臣に連絡、登廳を願ひ、その足で信濃町の池田邸にゆき、総理に會つて話してもらうことにする。九時頃大臣から電話あり、所得制限の緩和は総理反対、生別母子の問題は、孤児等も含め、児に着目してやるということになった由。こゝまでくれば、やむを得ない。

◎九月三日(土) 晴

朝黒金氏に電話して昨夜の模様を聞く。大臣の受けとり方と多少違う様だ。

午前、賀屋先生から次官に電話あり、所得制限緩和につき池田総理と話し或程度意見の一致を見たので、中山厚相が會つてもらつてきめる様にとの事。中山厚相は健康すぐれず、脳貧血をおこしたとかでゆくことを肯ぜず。十二時過次官とともにとかく、首相官邸にゆく。閣僚室で、池田総理を中心に、政府与党の連絡會議が開かれている。水田蔵相、迫水長官、党側から益谷、保利、椎名の三役、坊、黒金、高橋の三副會

長。一時頃終了。黒金氏に會つて、所得制限緩和の問題について話したが、池田総理は依然反対だし、またむしかへすのはかんべんしてくれといつてとりあげないので詮方なし。しかし、それも無理ないことである。その外の事項、軍人恩給との併給は蔵相の意見もあり、検討すること、生別母子の問題も同様検討のグループと。結核、精神の国保分、五割から七割への引上げが、年次的に引き上げるといふはじめの案をやめて、世帯主のみを七割に一括引上げということにしたと。この点は些か意外な退却。大蔵省の事ム當局の考へ反映か。

おひる次官は他出。午後帰廳。まあこの辺かなあというわけ。三時過退廳。

祥三今日から登校。

新政策の検討、今日圣済成長率九%を決め個々の政策も決めて、一応終結。総理は箱根へ。五日正式決定発表との事。

◎九月四日(日) 晴

暑さぶりかへし。

午前テニス。薫、母と箱根にゆく。

夕、禎浩、祥三を伴ひすしを食ひに町にでる。

◎九月五日(月) 雨

中山厚相の地方遊説の要旨とりまとめる。

午後、葉業會館で保険問題に関する来るべき社労委での答弁方針を打合せ。次官以下保険局の諸君と。

池田内閣の新政策、午前、政策審議會、午後総ム會を全て発表。社會保障関係、前景氣がよかった割に非常に渋いものとなっている。大蔵省事ム當局の意見が強くは入っている感じである。

◎九月五日(火) 晴

昨日発表自民党新政策、社會保障関係低調との声強い。

田中政ム次官今朝北海道より帰任。^(正)

午後三時半、中山大臣大阪より帰任。^(マ)

正午から定例の局長会議。

午後、明日の参議院社労委の準備として、大臣、政ム次官に保険医療費問題等に関し説明協議。^(義)

午後六時からホテルニュージャパンで新聞協会その他広告関係の人達による、僕の送別会^(マ)あり、広瀬課長を伴ひ出席。^(治郎)

◎九月七日(水)

十時から参議院社労委。医療費問題、及び、自民党の新政策における社会保障施策につき与野党から質疑。午後一時半まで。

午後、古谷製菓の佐藤君来訪。久しぶりであるが元氣である。

五時半から、参議院社労委のメンバーを中山厚相、星岡茶寮に招待。^(マ)

◎九月八日(木)曇

午後、共立講堂に自民党の演説会を聴きにゆく。小坂外相、池田首相、^(義)^(男)

水田蔵相、中山厚相の話を聞く。池田さんの話を聞いて、^(三) 圣済政策中心

の考へ方がよく分ったやうな気がする。社会保障第一といっても、やはり本質的には^(義) 圣済の循環からはぐれた者の救済程度にしか考へていないのではなからうか。中山厚相の話は田舎での話としてはよいが、東京での第一声としては一寸調子が低すぎた感。

五時半、共済會館に共済組合連合會設立十周年記念のパーティーに出席。^(忠)^(武次)

六時、さきに都廳から退職の羽田、関岡両氏を梅本君とともに招く。^(純正)

◎九月九日(金)曇

午前十時から衆議院社労委。

山下春江氏瀧井氏等年金問題医療保険等多岐にわたり、午後七時まで続行。^(義)^(商)

◎九月十日(土)晴

十時半から児童養育手当案検討。

新潟、北鮮との會談難行。そろ／＼最終態度決定のときなるも、外務省側日本案に固執、決裂を辞せざる勢なるも、それはとるべきに非ずと厚生省側の意見。^(知)

午後吉田、壺井両君を伴ひ映画をみる。^(知)

夕、萩尾又次君の長男修学旅行で上京中なるを茂運連れて来訪。^(山)

◎九月十一日(日)晴

午前テニス、午後休養。

◎九月十二日(月)雨

終日閑散。

正午から次官會議に出席。午後官房課長會議を開き、当面のスケヂュール検討。

◎九月十三日(火)雨

正午から局長會議。

北鮮帰還の新潟會談決裂か妥協かの関頭に立てる感じ。總理帰京の上での明日の政府首腦の會議を前に高田次官外ム省と打せ。^(正)^(義)^(合)^(義) 葛西代表の東京帰還問題省内で検討。

佐藤芳男氏、政調の喜多氏、横山氏等来訪。^(二)

◎九月十四日(水)晴

北鮮との新潟會談今日午後三時から。こゝでの北鮮側の出方を想定して種々協議。尚、夕、内閣官房副長官のところを外ム省側と打合せ。兩次官出席。明朝の總理のところでの打合せのそなへで。

田中政ム次官、今夜から選挙区の函館ゆき。^(正)^(義)

夕、上村氏と、今村君を伴ひ散策。^(国)^(友)^(カ)

小沢辰男君来訪。

◎九月十五日(木) 晴

今朝早朝、池田首相(勇)を中心
に北鮮問題打合せ。結論を持ち越し。

◎九月十六日(金) 晴

暑さぶりかへし。

今朝北鮮問題関係閣僚間で検討、六ヶ月延長の事に決定。明日提案の予定。
大臣(中山マサ)帰任。生別母子問題等検討。一応案を確定。

◎九月十七日(土) 晴

正午、東京會館で、高田次官(正巳)以下局長を交へ、賀屋興宣氏を招き同氏をかこんで昼食。先般、社会保障調査會での同氏の骨折に謝する意味で。佐藤芳男氏ラジオ放送原稿の作成に、大崎君(康)と共に手傳ひ、午後まで。

◎九月十八日(日) 曇

午前テニス。驟雨しばし来る。

午後昼寝。

◎九月十九日(月) 晴

次官會議に次官(高田正巳)に代り出席。

午後、国民年金積立金問題につき協議。

次官、大蔵省主計局長(石原周夫)に予算主要事項説明。

◎九月二十日(火) 晴

午前、医療協議会問題につき次官室で打合せ。

正午から定例の局長會議。

午後、医業聖堂実体調査の件打合せ。

国民年金問題で政調會と打合せ。

六時、日葉連總會に。そのあと鈴木万平氏らと會談。

◎九月二十一日(水) 晴

午前、保険審査官人事につき次官室で打合せ。

午後、新潟問題、尾崎(重敏)、熊崎君(正次)らと打合せ。

◎九月二十二日(木) 晴

先週金曜日新潟會談に關し打合せありし閣議終了後、中山大臣(マサ)が故意に登廳をおくらし記者會見の時間がずれた事が、クラブの憤懣をかひ、多少デリケートな關係(正)でなっていたので、昨日来尾崎君(重敏)とともにこれが調整をはかる。本日の閣議終了後、総理官邸に中山大臣を訪ね事情を話す。

本日記者會見に當り、クラブ幹事より、(1)先週金曜日のことに言及、記者會見の時間を守られたこと、(2)記者會見の際は、もつと突込んで問題の核心にふれて話してもらひたいことを云ひ、大臣より、第一点については遺憾の意を釈明し、一応けりがついた。しかし根本的には、中山大臣の見識についての不信任が因をなしている、これからも氣をつけないといけない。

午後、大臣政ム次官(務、田中正巳)以下主腦者集まり保険局のカナマイシン問題、医療協議会問題打合せ。

田中政ム次官(務)、党の保利総(茂)ム會長に會見話合ひたる結果もあり、医師會との摩擦、選挙前はさけるべきことを金科玉条とし、カナマイシン採用のため、医療協を何らかの形においても至ることは見込なし。

従つて、専決処分によるか、選挙まで延期するかを決断を迫られることになった。一方、肝心の保険局の決意もはっきりしないので多少齒がゆい感なきにしもあらず。夕七時頃退廳。

◎九月二十三日(金) 晴

休日。

祥三を伴ひ伊勢丹に藤田嗣治展等を見て、午後矢来能楽堂の誠謠會にゆく。「藤戸」(シテ田辺氏ワキ木村氏)^(繁雄)の地謡に出たのみ。

◎九月二十四日(土)晴

医療協問題に関し、次官^(高田正巳)に進言。今までカナマイシン問題は選挙後まで延期を終局のおちと考へていたが、考をかへた。即ち、医療費引上げ、医療協改組が、當面の主作戦になると考へられ、これに保険局の全勢力を傾注出来る態勢にすることが用兵の根本であるべきだ。その意味で、諸懸案の早期解決をはかるべく歯科関係の問題は医療協に附議して議定をみるべく、委員の発令その他の準備をいそぐ。カナマイシンの問題については機宜の措置をとる。かうして一面、歯科医師會から医療費引上げ問題を医療協に提起させ、主導権をとらせるとともに、医療費問題を医療協の土俵に引き込み、イニシアチブをとる。

この案の難点はやはり、大臣^(中山マサ)、政ム次官^(務田中正巳)の説得にあるが理窟上はいけなしいといはれる理由がない。問題は保険局の決意をこれに結集できるか如何である。

午後、次官^(森本潔)、保険局長より、政ム次官^(務)及び大臣にカナマイシン問題につき打合せ。

◎九月二十五日(日)晴

午前テニス。

◎九月二十六日(月)

十一時、三共^(万平)に鈴木社長を訪ねる。先日、鈴木さんからもゆめあり、日薬連として総選挙に関連し、政治献金をする対象の代議士について意見を求められていたのでその返事のためである。約一時間、社會労働委員會のメンバーその他のリストにつき意見をのべる。

正午から定例の次官會議。高田次官出張のため代つて出席。

夕、會計検査院齋藤課長以下を第一公邸に招く。今日から會計検査はじ

まる。

◎九月二十七日(火)晴

正午から定例の局長會議。

午後四時、自民党、政調會からのものとめに応じ、田中政ム次官^(正巳)とともに党本部にゆく。小山年金局長同道。

坊、高橋^(秀夫)、原田氏等政調副會長グループ国民年金の制度改革につき厚生省の考へを説明了承をうる。

速急に最終決定してP・Rすることに決定。

僕が前に業務にいた頃の仲間で構成のかすみ會、僕の官房長への轉勤を機に僕をかこむの會、山月荘で開かれ出席。約三十名。仲々愉快だった。九時過ぎ散會。

◎九月二十八日(水)晴

カナマイシンと医療協問題、今日も評定。

夜、田中政ム次官^(正巳)、武見氏^(務)と會合。良結果は期待するのが無理。

夕、黒金氏^(余光)小林氏三輪氏と歓談。

小沢辰男氏、池田派^(勇人)でゆくか佐藤派^(栄作)でゆくか迷っている。

◎九月二十九日(木)晴

冷気頓に加はる。

風邪気味のため、午後は早退臥床。

今日から列國議會同盟會議開催さる。

◎九月三十日(金)

正午から定例の官房課長會議。

午後、薬事功労者の大臣表彰者詮衡。

風邪気味のため謡やすみ。

■昭和三十五年十月

◎十月一日(土) 晴

九時半から来春年上級職の採用試験午後七時まで。今年は民間にゆく者多いと見え、一般的に成績よくない。

◎十月二日(日) 晴

昨日に引き続き九時半から採用試験約十人。

矢来能楽堂で金令會。能松風を母シテ、薫ツレで舞うので、午後一時、矢来にゆく。三時頃まで。よく出来た。

◎十月三日(月) 晴

午前、採用試験三、四人で終了。

正午、同和鉱業の久留島社長室にて、児童問題調査會理事會に出席。そのあと、先般の米国に於けるボイスカウトジャンボリーの写真を見せてもらう。

午後六時、宮崎^(本)元次官の七週忌につき宅にゆき、弔問。

旅装をと、のへ、九時一五分上野発北陸号で富山に向う。吉田君^(知水カサカ)随同。

◎十月四日(火) 晴

午前六時四五分富山着。縣藥^(務、塩岡良次郎)課長等の外業業関係者多数迎へてきておられ恐縮した。

直ちに海老亭別館にゆき休けい朝食。十時に縣廳にゆき、知事^(吉田茂)、部長に會ひ、記者會見。

十一時近く、広貫堂を訪れ、視察。

正午、金茶寮で縣業業聯合會の広瀬^(重造)、塩井氏等をはじめ幹部二十数名の歓迎中食會に出席。

午後二時出発、自働車で立山に向う。千寿ヶ原でケーブルにのり、美女平からジープで弥陀ヶ原ホテルまで。途中原始林あり。僅かに紅葉の程

度だったが、登るに従ひ、弥陀ヶ原一帯は紅葉の眞盛り。緑の針葉樹あり。紅葉、黄色、色とりどりで正に錦の如し。

ホテルに着いたのは五時頃。こゝは一九三〇米の高地で既に冷涼。

夕食後早目に就寝せるところやがで黒田君^(三郎)らに起され、楼上に出てみれば、天は明月皎々、雲低く沈み去り、富山市等の火点々。天晴れて山氣身に沁みる。

尚本日の同行、宇野^(佐)、黒田^(室田敏吉)、常田三氏。

◎十月五日(水) 晴

天気はよし。風はなし。絶好の登山日和。周辺の山々、平地、一面の紅葉朝日に映えて色殊の外鮮烈。

八時、出発。ジープにのり、室堂まで小一時間。室堂でジープを去り、歩いて頂上を目ざす。一の越の小屋で小けい^(急)。急峻の岩道をゆつくり登って、十一時頃、頂上を極める。海拔三〇一五米。神社あり、参拝。

室堂方面はガスでよく見えないが、槍その他の北アルプス連峰雲上に望見され、眼下溪谷の紅葉眞盛り。小けいの後下山。一越小屋で昼食。

下山にかゝり、室堂から再びジープでホテルにゆき、服装をと、のへて三時近く出発。千寿ヶ原に四時頃到着。

五時頃海老亭別館に到着。

夕、堀岡部長はじめ縣側及び塩井氏等業業側の招待で會食。

九時頃散會。早く寝につく。

◎十月六日(木) 雨

朝七時過、内藤前政^(務)次官を宅に訪ねる。今回の富山ゆきは同氏の選挙の声援と、薬^(務)局長當時の富山行き^(務)の約束を果すためであった。内藤さんも非常に喜ばれた。

七時三十三分日本海号にて出発、新潟に向う。

新津に久保薬^(務)課長と、渡辺国民年金課長迎へに来ており自働車で新潟に向う。十一時半頃到着。

こ、では、小沢君〔辰男〕の選挙関係が一つの目的である。諸般の状況を聴取、上げ潮のやうである。

午後、縣廳を過り、建設中の縣立ガンセンター及び、肢体不自由児施設を視察。

夕方は、母子會館で、畑縣藥劑師協會長以下藥業関係者約四十名の會合、會食。〔健男〕君衛生部長も出席。暗に小沢君のことども語る。今日の參會者同氏のため大いにやるという氣組顯著。八時近く辞去。旅館大野屋で久保君等と語る。

◎十月七日（金）雨

朝八時過、小沢辰男君來訪、状況報告あり、種々打合せ。

十時から北鮮帰還の日赤センターを視察。恰度今日出発のときであり、十一時近く、一同バスにて発車の状況。ついで埠頭に至り乗船の状況及び船内を一巡。十二時イタリヤ軒で昼食。午後一時、母子會館における藥種商約二百名の講習會に出席。約二十分話をし、三時新潟発の越路号で出発帰京の途につく。

午後九時上野駅着、帰宅。

◎十月八日（土）晴

今日総評系統の給与引上、国民年金反対のデモ、廳舎周辺騒々し。

留守中のこと等、聴取。〔池田勇人〕総理に届ける新政策批判に対する反論等いそぎまとめる。

午後一時半、都道府縣會館における大霞會總會に出席。映画離愁を観たのち、總會懇親會。五時頃帰る。

◎十月九日（日）晴

終日、新藥事法解説の原稿〔治郎〕（広瀬藥事課長以下執筆）を閲読。筆を加へる。

◎十月十日（月）雨

十時、党本部に前尾氏〔繁二〕及び大橋氏〔武夫〕を訪ね、小沢君〔辰男〕の党籍証明書のことで懇談。

十二時、大下回春堂に山口専〔正太〕を訪ね山瀬茂運の就職の件依頼。午後二時から年金積立金の問題打合せ、方針決定。

夕、小沢辰男君來訪。

夕、東横食堂に於て、東京五高會開催出席。池田総理、荒木文相〔芳春〕も出席。〔マ〕武夫原頭〔七草〕を武夫原頭：高唱して盛會。

◎十月十一日（火）晴

小沢龍氏の母堂先日逝去につき朝弔問に立ち寄る。

午後共產党の岩間正男氏ら多数おしかけ医療費問題等で陳情。夕、椿山荘で國際ガン学会のパーティーあり、出席。

◎十月十二日（水）晴

午後、熊本の坂田大氏來訪。

三共〔万平〕に鈴木氏訪問。選挙資金の件。

浅沼社会党委員長、日比谷公會堂で演説中刺され、死亡。かなり衝動を与へた。

◎十月十三日（木）晴

正午、定例の次官會議に次官に代り出席。〔池田正吉〕

日本医師會、代議員會で医療費引上げ等決議。午後、陳情に来る。〔池田正吉〕

浅沼刺殺事件に関し午後二時から臨時閣議。山崎國務大臣の辞任。〔マサ〕

中山厚相、今朝大阪から帰任。

夕刻、明日の社労委の準備のため答弁資料につき説明。

本日社会党臨時大會。

昨日来デモ続く。夕刻、国会、首相官邸周辺デモで一杯。〔正吉〕高田事〔務〕ム次官、夜、富山の出張から帰京。

◎十月十四日（金）晴

朝玉名の大石君来訪。^{〔多計七〕}

十時から衆議院社労委。折柄、閣議で大臣の出席おくれ、議員特に八木氏やかましい。閣議をきりあげて出てこいとか何時に終るか聞いてこいとか、つまらぬことばかりいので放っておいたら彼怒っていさ、かいさかひ。

閣議長びき、大臣十二時過ぎに出席。途中一時近く僕はぬけて、渡辺前大臣の求めにより、武見^{〔太郎〕}医師會長との會食に出席。高田次官も一しよ。^{〔緒〕}二時近く辞去。国会にかへる。結局三時半頃まで衆議院にかゝり、そのあと参議院社労委へ。六時半近く終了。久しぶりに謡の稽古。

◎十月十五日（土）晴

今朝役所では職組によるピケ。人事課長は昨夜三時まで組合と交渉した由。

九時、武見氏^{〔太郎〕}を宅に訪ねる。医療協問題等懇談。十時前辞去。

登廳せるところ、人事課長室に、職員組合多数入り、室外にはみ出し居る情況。人事課長と交渉とのことなるも、つるしあげ状況可なり興奮状況。組合幹部と人事課長ともぐ呼び出しこんな状態ぢや仕様ないから、別に組合の責任者が人事課長と交渉をもつことにして今日はもう止めよと勧告し、来週水曜日に會うことを約して、事態落着。組合側も解散。やつと静かになったと思つたら今度は自由労ム者の一團らしきもの次官に面會を求めて廊下喧^{〔騒〕}かま^{〔騒〕}し。これはやがて自ら引きとって行った。午後寺本知事来訪、阿^{〔藤〕}その事。

二時半、高井戸の浴風園で記者クラブの諸君と局課長メンバーと野球の試合。八対七でクラブ勝。仲々愉快だった。

軽く、夕食を済まして帰宅。中尾、橋本の両氏僕のうちに来訪懇談。八時半頃まで。

◎十月十六日（日）晴

薬事法解説の原稿閲読。

◎十月十七日（月）雨

十一時、薬事功労者につき大臣表彰。

午後二時から薬業會館で各局の庶ム課長會議、今後の厚生行政をどうするかで懇談。

夕、I・L・Oセミナー出席者のパーティー椿山荘にて行はれ、出席。

◎十月十八日（火）晴

正午から定例の局長會議。

◎十月十九日（水）晴

十時過参議院社労委。

おひる、大橋^{〔武夫〕}さんの秘書、不破氏^{〔直三〕}と荒木和成氏のことと會談。

東京地才で国立岡山療養所の患者から提訴の生活保護事件、敗訴対策打合せ、扣訴^{〔提〕}の方針きめる。

◎十月二十日（木）雨

午後一時から浅沼^{〔福次郎〕}氏の葬儀。

朝十一時、瀧野^{〔好〕}氏来訪。森本氏とともに荒木和成氏のこと懇談。

午後、生活保護問題打合せ。

夜、簡牛凡夫氏の招きで黒木^{〔利克〕}、渥美^{〔節夫〕}、上村氏とともに出席。

◎十月二十一日（金）晴

国会は今日施政方針演説。質疑開始。

正午頃国会にゆく。

午後薬事法施行令の事等打合せ。

◎十月二十二日（土）晴

午前、参議院、午後衆議院本会議。社会保障関係の質疑あり。午後から政府委員室に。明日の質疑に対する答弁の準備。夕方から、原稿点検。十一時まで居てかへる。

◎十月二十三日（日）晴

国会あり、日曜なれど出勤。

午前、参議院本会議。

午後二時四十分から衆議院予算委員会。予算委員会はつとは入りきり。超満足。

五時頃、成田氏の質問に対する池田総理の答弁中、説明の義務はありま

せんとやったのに端を発して、紛糾。仲々にまとまりがつかないで結局

八時近く再開。やがてはじまった瀧井氏八木氏の社会保障に関する質疑

に対する厚相の答弁、多少予定が狂いや、混乱。

◎十月二十四日（月）晴

午前、荒木和成を伴ひ、瀧野氏来訪。保険審査会委員の人事に伴う荒木氏身上の件。

午後、保険審査会委員の人事につき細目打合せ。

夜衆議院解散につきその時刻まで居る。

九時から衆議院本会議開會。暴力排除、公明選挙の決議等あり、そのあといわゆる紫のふく紗を官房長官捧持。議長が詔書朗読、自ら萬才を高唱して散會。一寸異様のふんい気である。

◎十月二十五日（火）晴

朝九時過大臣を中心にカナマイシン問題等省議。とにかく選挙すむまで話にならぬ。

午前、石井、細田両氏、事ム次官のところに來てもらひ保険審査会委員

の件交渉。

中村隆則君の来訪を求め、恩給局次長への轉勤の件につき話す。午後、警察庁江口警ム局長と會見、人事の件打合せ。

五時から六時まで大平長官、大橋氏、益谷幹事長に會う。小沢辰男の党籍証明の件、あやしくなったから。

午後六時、東京都薬剤師協会主催の、高橋勘次氏の厚生大臣表彰受賞の祝の會に出席。七時過散會。

◎十月二十六日（水）曇

午前から午後にかけて、黒金、龜山、大石その他の諸氏を訪問。

午後一時、加藤武徳氏を訪問。荒木和成氏の事。

午後早くかへる。

小沢君の党籍証明問題、相当困難な見込みが判明してきた。

◎十月二十七日（木）晴

おひる、東京駅で根岸、鋤崎氏等に會ひ、在京玉中会の開催の件打合せ。夕、高田次官とともに上京中の堀岡君を招き歓談。

◎十月二十八日（金）晴

朝閣議前に大臣を訪ね、留守中のこと諸事報告。

十一時半マスコミ倫理懇談会に大臣出席につき一しよにゆく。

正午、官房課長會議。

夕、八芳園でILO東南アジアゼミナールの諸氏を次官が招待、同席。三十一日の熊本縣社協大會に出席のことに急遽決め準備にかゝる。

◎十月二十九日（土）晴

朝九時半から新宿御苑で厚生省運動會、開會式に大臣も出席。

十時半頃登壇。仕事を片づけ午後また運動會へ。三時頃終了。少雨ぱらつく。

熊本行き、出発は明日午後二時半の日航機とする。

◎十月三十日(日) 曇

午前、熊本の郷里に送る荷物を造り発送。

午後一時頃家を出発、羽田に向う。飛行機整備のため出発おくれ、二時半のところが三時過になった。

機内では周東自治大臣、郵政事務次官(「務、加藤桂」)と隣り合せ。飛行機は天候が悪くて可なり動揺。体の調子が悪いのか、吐気を催す。とうとう福岡近くになって嘔吐。気分勝れず、六時半板付に着陸。

医務出張所の島崎所長以下迎へにきてくれた。車で市内にゆき、夕食をともにし、八時発の汽車で熊本に向う。十時半熊本駅着。縣衛生部長等の迎へをうけ、ホテルキャッスルにゆく。今後の日程等につき打合せを遂げ、やすむ。可なり疲れている。

◎十月三十一日(月) 晴

晩秋とはいへ熊本はさすがに暖かい。

朝、岡村一郎氏来る。

こゝのホテル、仲々しよしや、(「瀧、酒」)先般の国体には両陛下御宿泊。

九時半から開催。小山民労部次長の案内にて、縣社會福祉大會の各部會(「活動」)(五つ)を廻る。廻る先々で一言。十二時頃終る。

おひる、福田社協會長等と會食。(「令孝」)

午後一時半、熊日記者来訪。

二時半から大會の総會。功勞者表彰あつて大會に入り、僕は大臣(「中山マサ」)の代理で挨拶。午後四時頃終了。

六時半から大くらで寺本知事の招宴。(「広作」)民労部、衛生部幹部出席。十一時近く帰宿。

■昭和三十五年十一月

◎十一月一日(火) 晴

朝岡村氏来る。ともに、福田虎亀氏宅訪問。先生留守。坂口市長訪問。(「主税」)上京中不在。

それから新築の熊本城天守閣に登る。下手からゆ石垣の間を縫って天守閣にゆく道中も格別、大天守閣堂々とそびえて壯觀。登って四方の眺めを楽しみ、降って石垣の上を散策。観客多し。

十一時半頃化血研にゆき、ポリオワクチン製造所を見る。

十二時半、東洋軒に薬剤師會長等、(「戸田勲人」)藥業關係者約二十名の會合に出席。藥局局長時代来れなかつた償ひ。乱賣問題話多し。

二時半、児童福祉施設關係者の會合に出席。四時頃まで。

縣廳にゆき、知事等(「寺本広作」)に別れをつける。

五時半から縣廳の玉中同窓生の集まりに出席。七時半辞去。

ついで医師會長等、(「斎藤忠雄」)医師會幹部の會に出席。八時半辞去。

車で玉名の自宅にかへる。九時半頃到着。両親健在。来客あり。十一時過ぎまで。

◎十一月二日(水) 晴

朝の日射をうけての橡側は実に氣持よい。空氣も澄んで空も美しい。

九時半、吉田市助役、小岱篤之氏来訪。同道、市役所にゆき、橋本市長に會う。(「安二」)廳舎内一巡。

そのあと、縣の地方事ム所、保健所を訪問。ついで、蛇ヶ谷遊園地にゆき、偶々市役所職員(「三郎」)の国体での働らきの打上げ會。挨拶させられる。市職組の組合長は大石多計士君。

十二時半頃立願寺紅葉館にゆき、橋本市長、古閑山鹿市長の招きで昼食。

午後、菊水町にゆき、母子健康センターを見る。ついで、八嘉の種鶏場、伊倉のと殺場を見る。新築の高瀬大橋を渡る。

五時頃から紅葉館で橋本市長、猿渡商工會(「清田」)ギ所會頭の招きで夕食を共に

する。

これより先、新築竣成の玉名駅を見る。

七時過立願寺を辞去し、帰宅。

七時半頃から、宅に、小学時代の同級生諸君、藤本^(夏江)、萩尾等の諸士會同。十一時頃まで歓談。西川、田代、小岱君等も來會。

◎十一月三日(木) 晴

今朝はゆっくり休まうと思つていたら朝七時頃立願寺の渡辺先生一行見えた。九時半頃から小岱氏と一しよに、裏に新築された小学校を見、山に墓参りをした後、旧小学校へ。ついで小岱氏宅に。

正午近く帰宅。岡村君迎へに來り立願寺にゆき、化血研の竹内^(龍行)、六反田先生等と會食。

別席で渡辺太賀次氏と會ひ、當地の政情等の話を聞く。三時頃帰宅。

出発の用意を急ぎ、親子三人で早めに夕食をとり、近所への挨拶をすまし(目下稲の取入れで忙しい最中)、七時四十分玉名駅発の阿蘇号で上京の途につく。渡辺、猿渡氏等をはじめ多数の見送りをうけ、にぎやかに出発。尚、僕の帰郷中、随行の吉田君は阿蘇登山。鳥栖でわざわざ來てくれた医ム出張所の亀谷君に別れをつけ、就寝。

◎十一月四日(金) 晴

朝九時四十五分大阪駅着。

医ム出張所にゆき、ついで国立大阪病院に行つて布施院長に會ひ、入院中の中山福蔵氏を見舞う。元氣である。

午後、中山太郎氏にその宅で會ひ種々打合せの上府廳にゆき、高田副知事^(古野秀雄)、衛生部長^(福定泰一郎)、民生部長に會う。ついで、医薬品協會に持田氏を訪ね、警察に片岡刑事部長を訪ねる。中山大臣の選挙に關聯して、病院わきの山中莊に投宿。夕、藤原医ム出張所長、布施院長等と會食。早く就寝。

◎十一月五日(土) 晴

中山大臣は、今夜大阪着。明朝會う事とし、今日一日はあいてきたので和歌山にゆく。

九時半大阪発、佐成君が迎へに來てくれ、ともに電車で和歌山にゆく。直ちに縣廳にゆき、青木知事に會う。

民生部長室で縣の状況を聞く。正示氏の状況もよしと聞く。

十一時半頃縣廳を出て民生部長、佐成君、今泉君^(昭雄)等と和歌浦にゆく。海の眺めのよい料亭で昼食。終つて和歌浦一帯の絶勝を愛で、ついで紀三井寺に詣で、市にかへり來り、和歌山を見る。五時頃別れて電車で大阪にかへる。六時過難波に着。

久しぶりにのんびりと、心齋橋の通りを歩き、夕食をとる。八時過帰宿。夜三浦秘書官來訪。

◎十一月六日(日) 晴

朝中山太郎氏を迎へをうけ、ともに中山大臣の旅舎にゆき一昨日のことを報告。あわせて、病院ストの問題等につき話す。

大臣は演說會へ、僕らは駅へ。

九時五十分発の阿そ号で出発。帰京の途へ。車中相当の混雜。午後七時過東京駅着、帰宅。

◎十一月七日(月) 晴

十時過登廳。

午前、党本部に益谷^(秀次)、大橋^(武夫)、前尾の三氏に小沢君党籍証明発給の件礼をいう。

午後、宏池會の田村氏を訪ねる。

夕、大正生命の堀田^(雄男)、田辺両氏の招きをうけ、歓談。

◎十一月八日(火) 晴

厚生大臣招待の新宿御苑の観菊會。

恰度、玉名から上京中の玉中時代の先生林田先生御夫妻、連絡あり。代々木で待ち合せ同道、御苑にゆく。

厚生大臣も今朝大阪から飛行機で上京、観菊會に出席さる。

御苑事ム所にて病院スト問題説明。

正午から局長会議。

林田先生は一応厚生省に案内し、一時頃別る。

午後三時、官邸における憲法調査會に出席。地方行政との関係説明。

◎十一月九日(水) 晴

中山大臣を旅舎福田屋に訪う。

十時に首相官邸に藍綬、黄綬褒章授与式に出席。

午後二時半、浅野一雄君父君の告別式に出席。

五時、産聖會館に健保連の會合に出席。

六時千駄ヶ谷の体育館へプロテニスを見にゆく。九時半終了。我々のやっているのとは全く異質のものの感。

◎十一月十日(木) 晴

昨夜のプロテニス観戦で疲れたか、頭痛がする。

朝、西山君を樺島病院に見舞う。

おひる、次官に代り、次官會議に出席。

午後早退。

◎十一月十一日(金) 曇

大橋武夫氏の新潟の小沢氏の応援への出かけられることに決定。今夜出發明日午前中のみ。

中山大臣、今日長野縣へ。

正午から定例の官房課長會議。

午後五時半から三田良藏氏の藍綬褒章受賞の紀念の會に招かる。

◎十一月十二日(土) 晴

薬ム局喜谷製薬課長退職に伴う人事決定。

厚生省行政に関する調査に關し調査員(伊部企画課長等)會同。具体的打合せを遂げる。

午後、小沢君の応援のため新潟に行った大橋武夫氏を羽田に迎へ車中打合せを遂げる。

◎十一月十三日(日) 雨

先般の出張先への礼状書き。

松田君来訪。

◎十一月十四日(月) 曇

午前十時から診療報酬問題で次官中心に打合せ會。

午後四時、玉中会の開催の事で鋤崎君等と打合せ。

夕、築田社長、藍綬褒章受賞の祝ひの會に招かる。

◎十一月十五日(火) 晴

朝、最近癌研より退院の相山氏を宅に見舞う。

正午から定例の局長會議。

玉中会開催の細目、鋤崎君来り打合せ決定。

夕、予研外厚生省関係研究機関の長と會食。次官とともに。

◎十一月十六日(水) 晴

病院スト問題について厚生省としてアクションをとるべき段階と考へ、

午後次官室で打合せを遂げる。

午後四時次官とともに大平官房長官を訪ね、今夜のテレビによる三党対談の準備として、国民年金等について説明。

◎十一月十七日(木) 曇

医療費上げにつき大平長官、高田次官の會談で一致と、新聞で大きく
でて居り、いさゝか、びつくりした。

病院スト問題につき、大阪で大臣新聞発表することにつき準備。大阪の
方と打合せをとげる。これはあとでやめになった。

夕、桂で厚生省設立二十周年行事の打上げ會を行う。

◎十一月十八日(金) 曇

風邪気味なので午後早く帰宅就床。

今日発表の病院スト問題についての地方への通知につき電話で再々打合
せ。

◎十一月十九日(土) 曇

終日臥床。

◎十一月二十日(日) 晴

気持ちのよい快晴。

今日は朝から起床。

午後、投票に上北沢小学校にゆく。

七時から全国的に開票開始。

九時頃から□^(前考)には入るラヂオの得票放送を聞いていたが、十二時過か一
時頃だったと思う、新潟の小沢君^(辰男)當選確実の報を。これは幸甚しと判断。

新潟に電話したが本人はつかまらなかった。

自民党の調子よく、民社は著く不振。社会党ののび思ったよりも好調。

◎十一月二十一日(月) 晴

朝登廳すれば、小沢^(辰男)當選で省内非常に明るい。厚生省がその生えぬきの
ものを力を入れて応援したのははじめてだっただけに大きな喜びだっ
た。

午前党本部に、益谷^(秀次)幹事長、大橋^(武夫)副幹事長、前尾^(繁二郎)氏等を訪ね、当選の祝

詞と、小沢^(辰男)君の事についての礼を述べる。本部も仲々にぎやかである。

亀山孝一氏の票のび悪く、遂に、約一三〇票の差で次点となったのは返
すくも残念であった。一寸あと味が悪い。

午後、安井^(誠一郎)事ム所に祝にゆく。

午後四時半、ホテル、ニュージャパンに三共パークデビス社のパーテー
に出席。

五時四十分、羽田に、大阪から帰京の中山^(マサ)厚相を迎える。厚生省に、幹
部一同打揃って、乾杯。

七時、新宿御苑保存協会の会合に。

選挙の結果、自民二九六、社会一四五、民社^(十七)一六。民社の惨敗いさゝか
むごい感じがする位である。

◎十一月二十二日(火) 曇

午前、医療費問題を中心に協議。

正午から定例の局長會議。

午後も医療協議会問題打合せ。

午後四時から葉業會館で各局庶^(務)ム課長會、選挙の打上げ。

夕、中山^(マサ)大臣に医療協議会問題打合せ。大臣は今夕から熱海にゆき休養。

◎十一月二十三日(水) 小雨

休日。

午後五時から歌舞^(マ)岐を見る。本山の母^(式子)とともに。十一時帰宅。

◎十一月二十四日(木) 曇

午後勝俣稔氏を訪ねる。

◎十一月二十五日(金) 曇

小沢辰男君來訪。正午過ぎ黒金^(泰光)氏來り、三人で小沢君の派所属問題懇談。

正午から定例の課長会議。

午後三時から土建総連代表と會う。

二八日の参議院社労委の準備として中山大臣に当面の問題説明。
補正予算案の大蔵省意見分る。大体に於てよろし。

◎十一月二十六日(土) 晴

朝九時五分上野着の田中政次官^(正巳)を迎へにゆく。

十一時半から都道府縣會館の六階で「火の国に競う」という熊本の観光
宣傳兼国体記録映画の上映會あり、出席。一時過終了。松野鶴平氏、小
畑惟精も來會。

一方、十一時半から社會局創立四十周年紀念式典あり、欠席。

◎十一月二十七日(日) 晴

風あれど天氣清澄。

テニスにゆく。

◎十一月二十八日(月) 晴

急に寒さが加つてきた。

十時から日比谷公會堂で全国母子福祉大會。皇后陛下^(良子)、秩父宮妃殿下御
臨席。池田總理も出席。仲々立派な會合であつた。

午前午後、参議院社労委、六時過まで。

六時から紀尾井町で玉中會開催。とうとう會長にさせられてしまった。
久しぶりだったので賑やかだった。

◎十一月二十九日(火) 晴

頭微痛。

正午から定例の局長會議。病院争議の問題話はづむ。

四時半から環境衛生局の設置等機構改革の問題につき山口^(西)管理局長に説
明。

◎十一月三十日(水) 晴

十時から、賀屋^(興彦)、田中両氏^(正巳)に対して来年度予算の概要説明。

病院ストは厚生行政の失政との朝日、毎日の記事あり、中山厚相不興。
内閣改造問題と關聯か。カナマイシン問題大詰ながら仲々つまらない。
午後医療費値上問題につき保険局から聴く。

午後五時から三田第一公邸に於て後樂會あり。

■昭和三十五年十二月

◎十二月一日(木) 晴

カナマイシン問題、中山厚相、党幹部と連絡の結果もさっぱり片つかず。
補正予算に、生活保護の期末一時扶助、今冬から出する様補正予算に組
む様政調の方から連絡あり。唯、その額が一世帯五〇〇〇円というのでそ
れでは余りに小額に過ぎるので増額方要求。

◎十二月二日(金) 曇

午前九時半から藥業會館に於て医療費引上げ問題について次官以下官房
のものと保険局側會同。主として二七年医業聖營実體調査の□し方につ
き検討。

本日に閣議に、厚生白書を厚生大臣から報告。ところが池田首相^(男)、社会
保障聖費^(経)の国民所得に対し占める比率についての國際比較等に関する数
字等につきけちをつけ、批判をした様子。閣議後大臣よりその状況を聞
く。それによれば責任者出てこいとの話であつたといふので、直ちに
檜崎總理秘書官に連絡せるところ、首相にうかつた後返事あり。今明
日は予定がつまつて居り、そのあとでこちらから連絡するとの事。そこ
で、大平官房長官^(正芳)に會見を申込んだところ、それはあとでいゝとの事。
よつて問題になつた点についての説明を文書にして、とゞけることにし
た。

この事件で大崎企画室長は非常に責任を感じたが、内容はちつとも間違っていないし、見當も違っていない。唯新聞のとりあげ方が多少誇張的だったし、〔池田男入〕総理の氣にしている点に触れたということであらう。

尚本日の閣議で病院ストの問題につき、〔榊英〕石田労相から中山厚相に対し、多少批判的な意見があったらしく、これについては富樫〔総〕労政局長と連絡の上処理する。

生活保護の期末一時扶助、金額五〇〇円をもっと引上げの件、朝から政調副会長諸氏と連絡。午後の會議で一応一〇〇〇円とし、政府に申入れることに決定。

この件で夜十時過まで役所にいたが大蔵省反応なし。

◎十二月三日（土）曇

〔熊崎正夫〕朝會計課長から連絡。生活保護の件、どうしても五〇〇円を動かざるのみか労働者の日雇の方が三五五円から五〇〇円に引上げ両方同一額となった旨報告あり。一応、閣議で厚生大臣から頑張ることに方針をきめたが結論としては、これで決着ついた恰好である。

補正予算に関する臨時閣議は九時からで十時半頃には終る。

中山大臣、昨日の白書事件以来既に退陣同然の感あり。こゝ両三日、新聞で改造人事をめぐり、中山大臣につらく当るやうな記事続き、いやな感じである。

午後次官〔高田正巳〕以下官房課長だけ、厚生會館に會同。改造後の行政運営につきフリートークキング。四時半解散。

◎十二月四日（日）雨

厚生白書をあらためて読む。

◎十二月五日（月）曇

今日、議長選挙。首班指名の予定なりしところ議長人事でもめ、夜にいたるも解決をみず、改造、新大臣とはりきっていたところ待ち呆け。

午前、病院スト問題につき省内意見の統一をはかるため次官室で會議。新大臣の新聞記者會見用のメモ等用意。夕、看護協會幹部と會談。

◎十二月六日（火）晴

正午から中山大臣、〔マサ〕田中次官を中心にして局長會議メンバーで會食。

午後一時から自民党組織委、労働委、医療対策委員會の合同會議。病院スト問題で打合せ。

夕、第一公邸で亀山孝一氏の落選、残念會を局長會議メンバーで行う。

◎十二月七日（水）晴

國會の停滯かわらず、午前中は宅で休養。

〔藤之〕小岱氏ら保育所措置費の増額陳情のため上京來訪。

国会空轉を続け、午後にも夕方に至るも進展せず。

◎十二月八日（木）晴

〔藤之〕朝小岱氏來訪。

午後、赤星一郎氏來訪。

国会、話し合いつかず、午後にも夕方になるも駄目。一応帰宅、待機。結局両党の合意ならず、九時半、事務総長の職権で本會議開催。

〔二部〕清瀬議長選任。〔男入〕池田氏首班に指名。組閣多少手間どるかと思つたところ、大野派との話し合ひ簡単につき組閣進捗。夜二時頃、家をでて首相官邸に向う。途中、ラヂオで厚生大臣古井喜実氏に決定の旨を知る。着いたとき、官邸内カメラマン等大変。古井氏は既に會館の自室に引き上げたあとだった。直ちに會館にゆく。古井氏は記者會見中。それが終わって

から今後の予定等打合せ引き上げる。四時半頃帰宅就寝。

◎十二月九日（金）晴

朝九時過吉祥寺の古井大臣〔喜実〕の宅にゆき、車に同乗。車中で厚生省の當面

の問題等につき話す。

大臣は、三木武夫、松村謙三両氏を訪ね挨拶ののち、総理官邸に向う。ところが途中、車が混雑、時間がたち、とても十一時の認証式に間に合ひそうになくなった。高田馬場で僕は下車、電話でその旨官邸に連絡。大臣は宮中に直行。あとで聞いたところによれば、おくれて十一時十分に宮内廳に着いた由。

認証式のあと初閣議。終つて午後一時頃から厚生記者クラブで記者會見。午後三時、中山^(マサ)厚相と事務引継。つゞいて省員一同に対する挨拶。

政務次官、常任委員長決定。政ム次官は、安藤覚氏。この人は大森先生^(山本鑑大、吉武常市)と縁が深い人だった。

◎十二月十日(土) 晴

今日開院式。正午新^(務、田中正巳、安藤覚)旧政ム次官の廳員に対する挨拶あり。

午後一時からプリンスホテルに於て新大臣、政ム次官^(古井喜実)に対し、事務説明。午後六時過散会。

そのあと、厚生省に引上げ、次官を中心にカナマイシン問題、医療協問題につき^(森本潔、山本浅太郎)保険局長次長と官房側と打合せ。大臣は、カナマイシンについては、医療協にかげずに大臣の専決処分でやる考を事ム説明^(務)のとき述べられたにつき事ム當局に於て検討のため。保険局は専決処分に反対的態度を持ち、官房は大臣の考へを支持する態度で、結局、次官に一任。実体は大体、大臣の考へに従う方向。保険局の態度は不賢明であり、不可解である。九時過帰る。

◎十二月十一日(日) 晴

午後一時から厚生省に於て大臣、政ム次官^(古井喜実)への事務説明継続。五時半頃一応終了。

そのあと、カナマイシン問題をまたやったが、どうも保険局側ふんぎりが悪い。結局、明日夕方までに発表することとして段取りをきめる。

◎十二月十二日(月) 晴

今日から國會は本會議。

カナマイシンに伴う医療協問題につき検討続く。七團體側の反^(正巳)カナマイシン問題につき今日中に解決することを目途として、高田次官^(貞則)は朝高橋敏雄氏に會見。一方僕は、その結果をまたず、田中^(正巳)、山中氏^(貞則)ら國會の關係者に事前通告を行つて廻つたが、あつて十一時頃次官から高橋氏の反対意見意外に強硬なる^(正巳)につき一寸までとの事。大臣室で三人打合せ種々協議。大臣は尚初志を貫きたい氣持が強い。一応他の人々も当つてゆてくれとの事にて、次官は、大橋武夫氏、日^(貞則)聖連の前田氏に會見。そのあと、大臣を中心に打合せを遂げたが、一応本日は発表を見合せ。一日の余裕をおき医療協との關係につき更に工夫、努力することになる。

夜にかけ、中立委員のみ補充して、持ち廻りでやれるかどうかの目^(達)をつける様努力。結論は明日に持ちこし。

◎十二月十三日(火) 晴

十時から參議院本會議。

十時から衆議院社^(古井喜実)労委。大臣の所信表明のち病院スト問題につき質疑応答。十二時まで。

十二時から政調社会部會。各局から予算説明。二時半まで。

カナマイシン問題、穩密裡に医療協關係者と折衝続き、夕六時過には厚相^(政令)が児玉會長と會見。

大臣談話の案文何度かやり直してだん／＼角がとれ、六時過確定。

七時、政府委員室で大臣以下、記者會見。来月一日から実施することに決定。その具体的取運びを事ム當局に命じたということを発表。

一方、日患同盟の者数十名大臣室前に夕方から座り込み。

七時過僕はそこに赴き、會見。来月から実施する旨を傳へ、彼らやがて解散。

夜八時半から大臣を中心に次官^{〔高田正巳〕}、医ム局長等と會同。病院管理を附議すべき協議会の設置を決定。具体案を一兩日中に確定。金曜日の閣議に了解を求めることになる。

◎十月十四日(水)晴

衆議院予算委員会に出席。

午後昨日に引き続き、社会部會への予算の説明。これは、予算委員会に出席のため立ち會へなかつた。

五時からホテルニューロジャパンに於て田中^{〔正巳〕}、喜多氏^{〔二雄〕}らと政調會長への意見のとりまとめを行う。

六時から芝浦園で大臣の記者クラブ招待。そのあと、永井、中尾氏らと二次會。

◎十二月十五日(木)晴

十時から衆議院衆議院の社労委員会。日赤から参考人として葛西副社長^{〔嘉實〕}、労組代表者招致。病院聖營管理改善協議会の案確定。明日の閣議に提出、了解を求めることとする。

午後二時、社会部長の予算報告案、社会部會で審議の予定なりしところ、集まり悪く、その俣確定。

午後五時半から丸ノ内常磐家で、参議院社労委員を大臣が招待。

◎十二月十六日(金)晴

午前、午後、衆議院予算委員会に出席。

午後四時、田中社会部長の予算案を政調會長へ報告に立ち會う。カナマイシン問題、医療協議會の中立委員のみ補充して過半数とし、書類持ち廻りで決定。本日、同意の旨答申あり、明日告示の予定。

午後五時半、参議院社労委員を常磐家に大臣が招待。これでやっと一連の行事終了。

◎十二月十七日(土)晴

午前、衆議院予算委。これで質疑打ち切り。午後、討論採用^{〔説〕}。本會議夕方から。

高野六郎氏逝去。夕、信濃町の宅に御通夜にゆく。

◎十二月十八日(日)晴

午後一時半、北研講堂^{〔北里塾二部研究所〕}に於ける高野六郎氏告別式にゆく。

午前、午後、家の中の大掃除。

◎十二月十九日(月)晴

十時から参議院予算委。

午後一時から賀屋委員会、出席。

午前、午後、厚生大臣、医療費問題勉強。夕方、策戦をねる。

◎十二月二十日(火)晴

午前、衆議院社労委、八木氏^{〔一男〕}、厚相^{〔古井喜実〕}に対し、年金問題でしつこい質問。

午後、参議院社労委予算委、そのあと社労委。

五時半から中山前厚相を中心にその送別の意味で次官以下官房陣で小宴。そのあと、八時から赤坂プリンスホテルに於て古井大臣を中心に医療費問題今後のとり運びにつき協議。

その間、土建総連の連中、厚生省に陳情。そのながれ押しかけ来る。會はぬ。

◎十二月二十一日(水)晴

午前参議院予算委、午後衆議院社労委。八木氏昨日に輪^{〔二男〕}かけた形。

正午過、黒金氏^{〔泰美〕}に會ひ、医療費問題等につき打合せ。

五時半、町村會館に於て、小沢君^{〔辰男〕}の当選祝ひを厚生省、旧関係団体でパーティー。約二百名會同。

◎十二月二十二日(木) 晴

午前、年金積立金問題につき院内で年金・保険両局幹部と打合せ、方針決定。

参議院予算委員会、藤田進の質問あり、出席。

午後、衆議院社会労働委流れ。

夜、小林一恵氏の招きで、黒金^(泰美)、金子氏^(平九)らと歓談。

◎十二月二十三日(金) 晴

午前、国民年金の公的年金と併給の問題につき政調、社会部會、賀屋調査會の合同会議。小山年金局長の抗弁に拘らず、やるといふ方向が強い。党の予算編成大綱本日内定、夕方喜多氏^(謙)を通じて入手。夜対策を講ず。

衆議院社会労働委の開否をめぐり、与野党間種々^(経)至緯あり。午後四時過からはじまり、六時半終了。

◎十二月二十四日(土) 晴

九時半から自民党政策審^(審)議会、予算編成大綱審^(審)議。午後一時から同様総務會に於て。この間、十一時半局長會議を開き、その案を披露、総務會に備へさせる。

午後二時から三時まで口腔衛生保健協會の發起人會に出席。

午後三時半から医療費引上げに伴う保険の財政対策を聴く。まだ案になっていない。というより保険局はこの問題に本気でとり組んでいない。この分だとひよつとするとこの問題は収拾出来ない恰好になるかも知れないし、一そのこと退却して、医療協^(協)會の答申出次第いつでも補正予算を組むという態度までさがった方が賢明かも知れないと思ひ出した位である。

七時過ぎまで役所。

◎十二月二十五日(日) 晴雨

終日雨、来客。

◎十二月二十六日(月) 晴

医療費引上げの問題につき当初予算に組むことを固執することは、危険で、状況によっては、医療協議會の答申を得次第いつでも補正予算に組むことにして、当初予算は見送ることが、妥当の措置のやうな気がする。次官にもこのことを話し、古井大臣にも話し、一応既定の方針で進むも後者の方へ退くことまでを行動範囲に拡げて考へおく様進言。大体そういう態度で進むことにする。

正午、次官に代り次官會^(議)ギに出席。本日、歴代厚相をプリンスホテルに古井厚生大臣が招待。対医師會問題等につき意見を聞くことを考慮しての催し。

午後五時半から四谷福田屋に於て厚生大臣が社会部會の面々を招待。

午前八時半、党本部に於て組織委員會。ILO百二号条約批准問題について。

午後八時から約二時間、駿河台山ノ上ホテルに於て古井厚相、武見日医會長と會見懇談。

◎十二月二十七日(火) 晴

午前、大蔵省に大久保政^(武雄)次官、党本部に黒金氏^(泰美)を訪問。

正午から定例の局長會^(議)ギ。先日の日立市を中心とする厚生行政企画実態調査の結果報告。伊部課長^(英治)より。

午後五時半から医療ヒ問題対策、大臣中心に打合せ、八時にいたる。恭子、祥三、明日から赤倉へスキー行きの準備。

◎十二月二十八日(水) 晴

午前十時から赤坂プリンスホテルに於て党の福田政調會長等政調主脳部厚生省予算中の重要問題につき検討。こちらから両次官及び関係局長、

〔高田浩運〕〔熊崎正夫〕
官房長、會計課長出席。古井大臣も十一時過ぎから十二時近くまで出席。

十時からの予定なりしところ恩給問題が割り込み、十一時から午後一時まで。年金の併給問題、積立金、児童扶養手当、生活保護、医療費につき説明。

午後、役所におり、五時過から七時近くまで大臣室で医療費問題につき打合せ。

夜来寒気頓に加はる。

恭子、禎浩は早朝、赤倉へスキーに出かける。

◎十二月二十九日（木）晴

連日の仕事でさすがに疲労を覚えてきた。

十一時半、家を出て、林讓治、黒川武雄両氏宅に年末の挨拶。

一時頃登廳。

〔高田正巳〕〔喜実〕
次官とともに、古井大臣に対し、医療費問題に関し、医師會が協力的態度に出ぬなら寧ろ、当初予算に組まぬかも知れぬというアドヴァルーンをあげた方がよくはないかという趣旨の進言をする。

〔龍〕〔太郎〕
安藤政次官午後登廳。武見氏の年頭挨拶の短波放送の録音をきき、医療費問題については古井大臣、政治的生命をかけてやらなければならぬと思つたのでこの旨を大臣に傳へたいといつて大臣のもとにゆかれた。

〔興宣〕〔正巳〕〔卯一〕〔進次郎〕
本日十時から賀屋、田中、野田氏等小山局長を招き、併給問題打合せ。確定的結論を得ず。

医療費については、保険局、大蔵省と打合せ、先方の見解概ね判る。仲々渋い考へである。

◎十二月三十日（金）晴

午前、スキーの手入れ。

午後登廳。医療費問題で協議。

明朝からスキーに出かける予定なるも降雪多く、列車ダイヤ混乱の様子。

◎十二月三十一日（土）晴

寒気続き、北陸方面、 $\square\square\square$ 吹雪続き、列車百本以上立往生の様子。どう

も今年の正月はスキーは駄目らしい。
〔龍〕
才末につき、家内外、清掃手傳う。

〔栄藏〕〔久弥〕
大西、飯原氏来訪。